

デンなり地方の貴族又は名族を以て之に充つ郡の数は二「コントロール」の下平均五あり、郡長の成績優等なるものには「マヨール」の名譽號を與へ其俸給を月俸三百「グルデン」に上ほすことあり、現に此榮譽を受くるもの「ミナハツサー」地方に二人あり、郡長の下左の職員を置く即ち一人書記月俸二十五「グルデン」、三人警官兼小使月俸二十「グルデン」是なり、皆土人なり、郡の下之を數多の區に分つ、各區には區長一人を配置す之を「ホコン、ケドアー」と云ふ、俸給は毎月五十乃至百「グルテン」を給す區の數は一郡の下概して四又は五あり、區の下に村あり村は最下級の自治體にして村頭一人を配置す之を「ホコン、ドーアー」と云ふ、別に俸給なきも租税の収入の百分の八及住民百人に付一人の人夫を其所得とせり、村頭は村の住民より選舉せらる理事官の認可を要するは勿論なり、村には字あり字には字頭「コブラジャガー」二人を置く其下に字頭代理「メベター」一人を置く、此二人は村頭より指定せらる村頭は字頭を指揮して村内の事務を施行す、要之に「ミナハツサー」に於ける地方制度は瓜哇に於けるより頗る簡約にして、而かも政府の監督は一段の重を加へ殆んど直接支配と異なるものなきの觀あり

結論

第一節 蘭領東印度殖民政策論

吾人は足跡一度瓜哇に到り南洋特種の風光に接し、夫の平地に在りて其高さ人身を没するの甘蔗田か、一望千里に亘るの盛況を目撃し其年輸出額は特に二億「グルデン」に近かんとするを聞き、又規模の大なると天恵の厚きとを驚かしむる米田の大集團か、各所に連續して蘭領東印度住民の食料の大部を供給するの豊富なる收穫を擧ぐるを想ひ、高地に到りては近時大に頽勢に向ひしと雖尙ほ且年輸出額三千萬「グルデン」に達せんとするの「コーヒ」栽培の盛なる地帯を認め、同時に現に非常の好況を呈し年輸出額七千萬「グルデン」を超越したるの豊饒なる煙草耕作を見、或は海岸一帯の地に亭々たる椰子林の森立して其生産する「コブラ」の年輸出額は五千萬「グルデン」を出てたることを聞き、或は中部瓜哇に於て「チーク」林の寶庫を以て稱せらるゝ大森林の蜿蜒せるを目するに於ては吾人は其開發の大且盛なるを驚嘆せずんはあるへからず、又鐵道か瓜哇島内を四通八達

して苟も瓜哇の要所は殆んど其連絡を缺くものなく、加之平坦砥の如き完全に建設せられたる大道が村里に至るまで普く設備せられ、自動車をも以て何れの場所にも直に往來するを得るに於ては、瓜哇に於ける交通の便か實に其周到を極はめたるに驚かざるを得ず、此の如くして瓜哇の人口は一平方キロメートル平均二百三十人に達し、其年輸出入額は六億、グルデンを越ゆるを見る、此に於て吾人は大に蘭人が瓜哇開發の成功に敬服せざるへからず、蘭人が其之に到るまでに用ひたるの勞苦奮闘は吾人實に之を多且大とせざるへからず、亦實に各國の殖民經營者に對する一大參考資料たるは明白なり

然りと雖も吾人が眼を轉して瓜哇土人の實況を察するとき、慘又慘の極たるに驚かざるを得ず、夫の數千萬人の大數に達するの土人は殆んど皆赤貧眞に洗ふか如しと云ふべく、足には何等穿つものなく身には唯一片の粗布を纏ふのみ、家は竹の柱茅の屋根たる破屋見るに堪へざるものゝみ、其生活の下等なる實に豚犬と何等異なるなし、彼等の多數は床上に眠る能はずして土上に困臥せり、吾人は親しく其状態を見實に寒心震慄を禁する能はざりき、若し瓜哇土人をして

此状態を以て温帯以下の地に在らしめは彼等は困死飢渴の境に迫るは明かなり、瓜哇に於て其結果を見ざる所以のものは全く一に其熱帯系の天惠の高大なるに依らすんはあらず、瓜哇は常夏にして其氣温終年華氏の八十五度内外にあり、一枚の白衣は以て優に一年を支ふるに足り、席なく唯地上に因臥するも敢て凍死の憂無し、天惠厚き果實の豊富は終年絶えることなく善く土人をして之に依るも其生命を維なかしむ、彼等は「サゴアイル」の天然酒に渴を濕し且酔を買ひ、「バナ」、「マングー」、「マングスチン」、「ドリヤン」、「ポーアチーク」等自然果實の美味に鼓腹するを得るのみ、要之に瓜哇土人は全く天惠にのみ依りて衣食生活するものなりと斷言して可なり、蘭人は其上に極端なる壓制を施し土人を遇する奴隸以下犬豚と同一視せり、吾人は實に其虐政虎の如く狼の如く恐るべきの甚しきに絶驚せり、之を吾帝國の殖民地たる臺灣及朝鮮の狀態に比すれば其差霄壤月鼈よりも大にして、吾人は臺灣人及朝鮮人の幸福の大なるを眞に賀せずんはあるへからず、蘭人は唯土人貴族に對しては驚くべきの優遇を與へたるものあるのみ、土人貴族は殆んど滑稽に類するの驕奢を極はめ歐人を超越するの暴侈を逞ふ

せり、此等は吾人一片の通過客と雖も甚しく不快の感を起さしむるものにして、其人格及風尚の毫末も國家的基礎たり得べきものを認むべきもの有りて存するなし、要するに和蘭は瓜哇の土地の開展富源の討尋に付ては非常の大努力を用ひ正に一大成功を收めたりと云ふべきも、其之に因りて生ずるの利得は毫末も之を土人に分與せず悉く之を自己に收め唯其一部を土人貴族に分てるものあるのみ、換言せば多衆土人には之を奴隷を以て遇し極端なる壓迫を加へ、其富源は悉く蘭人の蹂躪に任ずるものと云ふへし、一言を以て之を被へは蘭人は瓜哇の上に古代殖民の謬想たる貴金主義を忌憚なく極めて猛烈に實行したることこの、貴金主義を一貫したる殖民地の好模型たるのみ、學者は之を評して蘭人は瓜哇に於て一大商業を行ひたるのみと之れ決して過言にあらざるなり

此の如き政策は遂に能く和蘭の成功を齎らし來らしめたるか、固より和蘭か之に依り過去に莫大なる利益を占めたるは明なり、和蘭の富力は實に其大半を蘭領東印度に收めたるものと云ふへし、然りと雖是れ唯金錢上の利益に止まるのみ、蘭人が過去に於て三百年の長日月を費して蘭領東印度殖民地の上に建設し

たる根抵は果して堅確不可拔のものなりと云ふべきや、之を例ふるに根抵充實して其技葉鬱蒼繁茂せる大樹の如く、暴風幾度か襲來するも能く之に耐へ微動をも感せずものありや、技葉の繁茂は中天を被ひ美花咲き良果累累たるも其根抵は唯僅かに地上に置くに過ぎず極めて且淺くして、一朝大風來らば恰も葶殻を飛ばすか如く直に傾倒轉回するものに似たるものなきや、吾人は不幸にして蘭領東印度の現状は其全く後者に屬するものたるを斷言せざるを得ず、何となれば蘭人の東印度に於ける土人の精神上に於て全く何等の根抵をも有せざればなり、三百年の星霜は實に長日月にして蘭人の行政一度其當を得るに於ては、瓜哇土人をして此間に全く和蘭の赤子たらしむるは決して難事とせざるなり、然るに和蘭の過去の歴史は全く一箇の虐政史なり、故に此長時日も徒に土人をして蘭人を怨ましめ蘭人を反離するの心を強からしむるのみ、現時の瓜哇土人は全く蘭人の恩恵を知らず蘭人に對しては寸毫の同情心も在て存するものなし、而かも土人の宗教は悉く「アラビヤ」人の手中にあり一に回々教者の左右する所と爲れり、茲に至りては和蘭政治家の餘りに放膽なるを吾人は空しく驚嘆

するのみ、故に今後一朝事變起ることありとせば、忽に蘭領東印度殖民地は土崩瓦解して、其大富源は立ちに蘭人の手より脱離するに至るべきは何人にも明白なる所なり。蘭領東印度殖民地の本國たる和蘭は瓜哇を去る八千五百マイル以上、の遠距離に在る西歐の西端にあり、其本國の兵力の何者たるや、は世間既に定論あり、敢て吾人の呶々を要せず、其本國の兵力が固より其殖民地を維持するに足らざるは極めて明白なり、然らば蘭領東印度自らに於ては相當の防備相當の兵力の能く外敵内亂に對して其獨立を維持するに足るべきもの存て存するやと問ふに、其根本に於て多衆土人の精神は最早全く蘭人の上に存在せざるは既に述ふるか如し、加之其兵力に至りては吾人軍事上の知識を有せざる者は漫りに之を論評するの資格を有せずと雖、若し軍事専門家をして其現狀を視察せしめんか、蓋し思半はに過ぎざるものあるへし、吾人は在留の一獨逸人に聞けり、蘭領東印度の兵備なるものは唯一玩弄具にして全く裸體なりと蓋し適評なり、吾人か通過の際に偶々見る所を以てするも餘りに其兵備の軟弱なるは蘭人の意思の何れにあるかを疑はしむるに至れり、例へば其陸兵の大多數を占むる土人

兵は常に妻子を同伴して兵舎に在り、旅行にも亦妻子を伴へり、夜は妻と共に舞踏を樂み、晝は閑あれば一文賭博に耽り、其風紀の頹廢は全く苦力に異るなし、又其軍隊の中堅骨子とも稱すべき歐人兵は皆歐洲の雇兵にして、其風紀精神は果して蘭領東印度の干城たることを得るや、吾人は「スラバヤ」に於て此忠勇たるべき歐人兵に付一奇談を耳にせり、即ち瓜哇に於て近年醜業婦一掃排斥の快舉あるや、一兵舎所在地に於て又其當然の結果として所在醜業婦の引上を命したり、然るに所在の歐人兵は團結して其上官に上書して曰く、吾軍隊が大に艱難を忍びて熱帯地の防備に従事するや、多少の浩然の氣の養ふもののあるにあらざれば、在留するの苦を忍び難し、今や醜業婦全部の引上を見るに於ては、吾人は止むを得ず共同一致して辭職し歐洲に歸去するのみと、上官は其要求を容れて特に醜業婦の在留を默認せりと、此珍話は全く事實談にして、而かも最近の事實なるを確聞せり、亦以て所謂歐人兵の紀律を想像するに足るへし、居留の一外國人は吾人に告て曰く、瓜哇の軍隊は大砲の實彈一發せんか直に散亂せん兵士の目的は一に衣食にあり、防衛は唯其形式に過ぎすと、少しく冷評に過ぐるも亦一

見解なり過去の歴史は實に一例證を與へり、英艦の會て「バタウイヤ」の沿岸に迫るや砲臺は一發の之に對するものなく直に白旗を擧げ瓜哇の全島は一戰を経ずして英領に歸したり、現時も其當時に比し格別の差あるを見す固より兵力の當時に比し大に優れるものあるは明かなるも、其外國に於ける兵力武備の進歩は甚しき長足のものにして到底之を比較するに堪へざるものあればなり、要するに瓜哇は外に之を守るへき眞實の軍備なく内には土人の上に全く精神上の根柢を見出さず恰も沙上の一大樓閣たるのみ、一朝迅風の來るあらんか其回轉の免るへからざるは蓋し止むを得ざるの運命なりと云ふべきか

試に眼を放つて瓜哇の周圍を見よ、英國は前面は馬來半島より後面は濠州大陸及「ニューグイニヤ」より、其先鋒は已に「ボルネオ」の一部に在り、其炯々たる眼光は常に蘭領東印度の全體を被へり、獨乙は主として太平洋中の獨領殖民地に依り近くは「ニューグイニヤ」の一部及「ビスマルク」群島に依り其巨腕の一半は將に蘭領東印度の上に到らんとせり、米國は「ヒリッピン」島より其隙を窺へり、佛は「コーチン」支那に據り密に其眼光を輝かせり、列國の手腕か未だ現實に蘭領東印度の

上に伸ひざるは列國間の勢力の權衡か正に其中を得たるか爲めのみ、殊に英國の如きは主として支那方面に其勢力を集中せるものなるを以て一時少閑を見たるも、一朝支那方面の大勢の解決の告ぐるの日は蘭領の天地は夫れ實に列國の勢力の現實なる交衝點と爲り、其運命の全く「アフリカ」に酷似するものなきや是れ實に今後に於ける一大問題なり、況んや近時西歐に突發したる大戦亂は終に亦蘭領東印度の上に如何なる大波瀾を起伏せしむるに至るへきか、吾人は括目して寸毫も其注視を怠る能はざるなり、茲に至りて和蘭政府の神經の過敏なるは亦實に止むことを得ざるなり、若し夫れ其實狀を暴露せんか和蘭は亦蘭領東印度を以て到底其永久の領土なりと思惟せず全く一時の委托物なりと自信するものゝ如し、故に其施政は概ね一時的にして常に金錢上の打算にのみ是れ齟齬せるは其主因の全く茲に存するものと謂ふべきか、要するに實に過去三百年の長日月に於て和蘭か其施政の方針を誤り、蘭領東印度をして遂に其眞正の領土に變ずるを得ざりしものは正に其大失敗と謂つへし、吾人か其現在に於ける和蘭政府の窮狀を見て殖民政策の根本方針確定の緊要を極めて明に認識せ

り、和蘭にして若し其始に當り根本政策をして當を得たらしめんか、今日は枕を
高ふして蘭領東印度を以て其第二帝國たるを得せしめたるは明かなり、其三百
年の長年月を費したるの後尙且將に其領土の全部を失はんとするの悲運に遭
遇する所以のものは實に殖民政策其根本を誤まるの罪なりと云ふべきのみ、茲
に至りて吾人は殖民政策の根本基礎を定むるに於て寸毫の差は其終末に至り雲
泥萬里の違あるを來し殖民政策の根本を定むるの極めて重且大なるを明にせり、
吾帝國に於ても臺灣及朝鮮は此點に於て全く何等の疑を容るべきものなしと
雖其近き將來に於て真正に吾領土に屬すべき地方の政策を定むるに當りては
亦遠大なる深謀長計を要し決して忽諸に付すべからざるなり、世間近眼者流か
往々國家を誤らんとするは實に恐るべきの甚しきものなり、和蘭の商人政策は
最も好き前者の覆轍と謂ふべきのみ、吾人は本論を終るに當り次節以下に和蘭
本國の國勢一斑と同時に「チムメルマン」氏の英國殖民政策論及佛國殖民政策論
並に「ロロフ」氏の最近世に於ける歐洲各國の殖民的態度とを譯出して蘭領東印
度を併せ研究するの資料に供せんことをす

尙ほ茲に一言を附加すべきは蘭人官吏は吾人に説明し其自國の政策を辯護し
て曰く蘭人の東印度土人に對する甚た殘酷に過ぐるものあるの觀ありと雖も
其實土人の知識、文明の低度なるに依る當然の結果なるのみ此幼稚の人民か異
日相當の程度にまで其文化を進むるの間は吾人は其後見者として極て嚴格な
る監督を要するのみ要之するに現時に於ける蘭國政府の方針は全く東印度に
對して後見人的監督政治を行ふのみ少しく嚴格に失するの嫌あるも其土人が
成長に到るまでは極めて良習慣を養成するの必要上止むべからざるものあれ
はなり恰も嚴重なる後見人は其兒童をして甚た苛刻の感を抱かしむるも其實
は兒童の將來を想ふの最深の慈悲心に出でたるのみ土人か他日成育の日は今
日の蘭人の政治は彼に對するの好教育たりしことを感知するに至らんと何そ
其立言の巧妙なるや果して蘭人官吏の説く所の如く蘭人は土人の後見人を以
て任するものなりや然らば和蘭は東印度開發に依りて得たる利益は悉く之を
被後見人たる土人の爲めに蓄積保存するを要す他日土人か成人の曉は全部を
擧げて其有に歸せざるべからず然るに其實は之に反し和蘭人は名を後見人に

借るも其得る所の利益は總て自己に壟斷して毫末も土人に分與せず是れ後見人として正當の處置たるや恰かも後見人か兒童の財産を蕩盡消費して兒童を遂に貧困窮迫に陥るゝと全く異なるなきなり故に曰く蘭人官吏の謂ふか如く眞に和蘭は土人の後見人たるを以て自任するものならんか吾人は世界人道の見地より立て大に其不法を責め速に後見人の變更を要求せざるの止むなきものあるを信するなり是れ全く無益の贅言たるも苟も和蘭の東印度政策の根本の缺點を擧ぐるに於て一度は論及せざるを得ざる所なりとす

第二節 英國殖民政策論

本節は千九百一年發行「テムメルマン」氏英國殖民地論中より抄譯するものにして亦蘭領東印度を研究する者の參考に資せんとするに外ならず
十七世紀及十八世紀に於て英國が其殖民地の上に獲得したる成功は實に驚嘆の價値を有するものあり然りと雖其殖民政策の原則たるや當時他の殖民國が執れる所の主義と根本的に異なるものあらざりき天下の大富源と稱せられ半

は小説的の歴史を有する印度及東印度地方を採檢せんとするの渴望は、大に英國の探檢家及殖民家を刺戟して約一世紀間は永く其殖民の先導を爲せり、而して金及其他の貴金屬の大獲得に對する希望は「ニューエングランド」に於ける英國の最初の移住者を刺戟したること、其亞米利加に於ける最初の「スパニヤ」人の奪掠者に於けるよりも一層強烈なりき、其商會社及殖民會社の特權は廣大なる殖民地の上に於ける保護狀の授與にして全く其範を「スパニヤ」に採りたり、其他關稅内國稅、貿易、農業及工業等に關して亦英人は第十七世紀及第十八世紀に於ては「スパニヤ」佛國及和蘭等と全く同一なる貴金主義の原則を執れり、故に其殖民地に於ける英國の最初の行政は之を當時の其競爭國に比し、更に深謀及遠慮ある偉大なる根本觀念の存在を認むるものあらざりき、若し當時の英國殖民政策として之を他國に比し特に超越したるものありとせば、是れ即ち其政府者の指導が明知及卓見とを有したるにあらずして、其驚くべき毫も刺戟を待たざるの大勇氣及企業心と、深き根柢を有する自由及獨立の尊重並に其國家組織に長するの天性とか英國國民に存するに在るものと云ふへし、政府は當時其措置甚

た宜を失ひたるもの多かりしと雖、英國々民の天賦の良性に依り遂に新なる英國殖民地は速に開發すへき自尊的團結を爲し、善く外國に於ける諸般の事情に適應し其需要を充たし其目的を進捗し毫も政府の援助に依頼し又は政府の箝制に抑壓せらるゝことなく獨立獨歩して自ら遠大なる發達を企てたり、獨り西印度に於ては其氣候か白人の移住を固く妨害するものありしを以て英國殖民の特徴の「ニューエングランド」に於けるもの如きを見出す能はさりき、印度及「アフリカ」に於ても英國の農夫の移住は全く好望を缺きしと雖遂に英國民の努力は第十七世紀及第十八世紀に於て英國をして世界的強國の地位を取得せしめたると同時に、其殖民的才幹の非凡なるを事實に立證せり

英國政府の殖民地に對する態度は當時常に數多の缺點を有したることは否認すること能はさりき、十八世紀に於ても千七百二十四年—千七百四十八年の頃に於て當時の英領殖民地たる米國の事務に關しては「ニューエングランド」は一の島なりと信し「ジャマイカ」島は地中海にありと思考せる政治家より指導行政せらるゝことありき、故に「ニューエングランド」の殖民地に一揆の起るや倫動に

於ては之を以て之を以て當時英國本國の殖民地事務に従事する官吏か、常に其殖民地に關して總督の報告にのみ依頼し單に之を通讀するを以て甘んじ、何等の研究監督を用ひさりしものに其罪を歸したるものは全く故なきにあらざるなり、英國は其始め殖民地の事務の指揮に關しては特別の一定の機關を有せざりき、其稍や一般的性質を有する問題に付ては樞密院か之を解決したりしも其通常の事務は其利害關係者の處置に放任せり、始めて「チャールズ」第一世に至り樞密院の下に立つ特別の會議を「ウィルギニア」の事務の爲に設けたりと雖も此新なる機關は十分に其希望を充たすこと能はさりき、千六百三十四年に殖民地の最高の指揮は十二人の委員に任せられたり、其中には二人の大僧正及大藏大臣をも加へたり、此委員會は「ニューエングランド」の殖民地か其權利として要求せし大なる自由の請求に對して抑壓を加へんことを力めたりしも、格別の效果なくして英國の革命は此問題を一掃し去れり

千六百四十三年に英國議會は殖民地行政の指揮を五人の上院議員十二人の下院議員より組織せる委員會に委任せり「オリヴァー」コロムウェル「ロルドベムブ

ルーク「サーヘンリー」ウエース等其中に加はれり殖民地事務總裁として「ロール
トワルウイツク」は其委員長と爲れり「チャーレス」二世が英國皇帝の位に即くや
千六百六十年に於て樞密院中より選任せる委員を以て組織せる殖民事務委員
會を設け同時に其元來の行政廳として殖民地會議「コミチー、フラーア、ゼー、プレ
ンターシイオン」を新設せり、是れ千六百七十年に於て千六百六十年に設けられ
たる貿易會議「カウンスル、フオーア、トレード」と合同して一官廳を爲し貿易及
殖民地會議「カウンスル、フオーア、トレイト、エンド、プレンターシイオン」と稱せ
られ「ロールド、セーフテスバーク」に依り其事務を指揮せられたり、千六百七十五
年には之に代ふるに樞密院より選ばれたる貿易及殖民地事務廳が設けられた
り「ウィリヤム」三世は千六百九十五年より貿易及殖民省「ボード、オブ、トレイト、エ
ンド、プレンターシイオン」を設くることを決定せり、此官廳には「イ、ロツクエアール
オフ、ブリジユワーター、イ、メツトフネン」等が其事務に従へり唯其管轄は「アメリ
カ」の殖民地にのみ制限せられたり、蓋し當時は印度の事務に關しては全く之
を東印度會社に委任し「アフリカ」の殖民地に付ては未だ此問題を生ぜされはな

り、千七百六十八年には「アメリカ」大臣の任命を見るに至れり「セクレタリー、オフ、
ステート、フラーア、ゼー、アメリカン、テパートメント」此官は「ニューエングラン
ド」殖民地の消滅と共に廢止せられたり、千七百八十二年—千七百八十六年には
内務省が殖民地事務を取扱ひしも再び貿易及殖民事務に關する樞密院委員會
を設けらるゝに至れり、革命戦争の起るや千七百九十四年より軍務大臣が殖民
行政を所管するに至れり貿易及殖民地會議は千八百十年に廢止せられ軍務大
臣は千八百五十四年迄殖民地行政の指揮を爲せり、千七百八十三年より東印度
事務監督廳が別に獨立して設けられ後年に於て印度省に變化せり

「ニューエングラント」の損失は當時の最も價值ある殖民地を失ふものにして英
國の殖民政策上に根本的の大効果を與へ爲めに英國殖民上の希望及熱心が一
時沈靜を見るに至れり、此時代に於て黒人賣買に關する批難は英國に於て突發
し英國の有力者の一隊は西印度殖民地の需要に付ては何等の考慮を用ゆるこ
となくして大に不幸なる「アフリカ」人の運命を憐れみ、佛國に於ける人權、自由、同
權及四海同胞等辯護者か尙ほ未だ此問題には考及せずして其奴隸の幸福を全

く白人殖民者の利益の犠牲に従属せしめたるに拘はらず、英國に於ては盛に其救済を唱導せり

革命戦の間に於て總ての海外の和蘭及佛國の殖民地は悉く英國の支配下に屬し同時に西アフリカ及濠洲に於ける殖民的試験は非常の成功を齎せり、此時より英國の多數の政治家は急に黒奴問題に關して全く口を緘するに至れり、然れども其數年來熱心に唱導し來れる運動を一朝にして之を抑壓し去るは亦困難の問題にして、遂に英國は其殖民地に奴隸の輸入を禁止するに依り生ずる損失を他の殖民國に於ても亦奴隸使用を抛棄せしむるに依りて、之を平均せんことを力めたり

北米合衆國の獨立は新なる英國の殖民政策上に一大影響を與へたり、英國の政治家は爾來數十年を通して他の進歩せる殖民地か亦合衆國の例に倣ひ一朝に本國より獨立するに至らんかとの懸念及恐怖を常に其胸臆に懷抱するに及へり、カナダ、濠洲及南アフリカに對する英國政府の態度は殆んど常に此觀念より導かれ、此に於て貴金主義の貿易方針は根本的に破壊放擲を見るに至れり、蓋し

此の大恐怖心の伴ふにあらずんば其殖民地に此の如く廣大の範圍に於て貿易及行政上に自由を許容するに至らざるは明白なり、今日總ての英領殖民地の政策を指揮する根本的觀念か海外の殖民地には純然たる自治的にして善く其自らの需要に適應せる團體を形作らしめ、其本國との間に共通の利益及眞實の愛情の保持に因り強固なる團結を爲さしめ、決して強制力にのみ依頼して其團結を計ることを力めざるの大方針を確立せるものは、洵に北米合衆國獨立に依り得たる間接の賜物なりと云ふべし

千八百三十年の終に於て先づカナダに於て自治權に對するの要求及其收入を自ら處理せんとするの請求か高まりしとき英國に於ては之に對して大々的の抗議を發生せり、ウイリヤム第四世は從來カナダ總督より任命したる評議會議員を選擧に依らしめんとするの請求の如きは絶對に認可を與へざるべきを宣言せり、デューク、オフ、ウエルリントンは此の狀勢に放任せば軍隊又は軍艦上に於ても遂に人民か選舉權を主張するに至らんと杞憂せり、ロールド、ドルハムは千八百三十九年にカナダの希望に對して一の意見書を發表せり、千八百四十年

に「カナダ」の請求は其主要の點に於て「ロールド、ドルハム」の意見に従て大體採用せられたり、此の如くして「カナダ」に於ける憲法の先例は千八百五十年に濠州に於て完全の自治及責任ある政府を認めらるゝに至れり、千八百六十七年に「ドミニオン、オフ、カナダ」に於て、千八百七十二年喜望峯殖民地に於て、千八百九十三年に「ナタール」に於て、亦完全なる責任ある政府を認めらるゝに至れり、此等の殖民地は其内閣を自由に變更し其官吏を任免し及び立法權の自由行使を許されたるのみならず、貿易上の政策に關しても完全なる自由決定權を有し關稅の如きは其本國に不利なる決定を爲すも亦其自由にして何等の干渉束縛を受けざりき、此の如き完全の自由を殖民地に許容するは其本國との獨立又は分離を齎らし來さるやの杞憂は全くの謬見に屬して、却て此自由を許容したる以後の殖民地は其本國に對する眞正の忠實を確認するに至れり

十九世紀に於て英國政府の其殖民地に對する態度の變更は固より従前の制度に附帶したる諸般の利益を奪去したるは明かなり、即ち殖民地の負擔を以て本國貿易の利益を計ること、本國の財政の爲めに殖民地に租稅を賦課すること、殖

民地に於て本國政府の寵幸者に特別の利益を與ふること等は爲めに全く之を主張する能はさることゝ爲れり、爾來殖民地は英國貿易、英國の企業心、英國の移住者の自由なる天地として政治上之を主張するに止まれり、而して本國は殖民地の爲に殆んど毎年巨額の補充金を支出して之に對して殖民地よりは何等直接の利益の獲得するものなかりき、此事情は遂に二十年及三十年以來英國の本國に於て殖民地維持の必要ありやの問題に關して眞面目なる疑惑を惹起するに至れり、即ち千八百二十三年に「デ、ヒューメー」は議會に於て殖民地は本國を強盛ならしむるものにあらずして却て弱衰せしむるものなれば寧ろ之を拋棄するの優れるに如かずと放言せり、千八百三十年に「サー、ヘンリー、パーネル」は其著財政改革論に於て、殖民地の歴史は永き期間に於て巨額の損失及資本消費の歴史にして、此の如くして失ひたる數百千萬の私人の資本と英國の本國か租稅を以て支出したる巨大の消費とを計算するとき、英國か其殖民地の爲にするの總損失額は實に非常の金額に上ほるものと云ふへし所謂殖民地の大富源の發見の爲めに多數の人命と莫大の金額を費消する如きは、洵に狂愚の措置と謂は

さるへからすと論結し「セイロン」島、喜望峯殖民地「マウリチウス」島及北米の「カナダ」殖民地の拋棄を眞面目に主張せり、之れと同一の議論は「イ、セント、ミル」に依り代表せらる、彼は其著立憲的内閣論中に英國か殖民地に依りて其貿易及體面上に獲得する利益は殖民地の喪失に依る政費の節減と兵備の減少とに因りて優に之を償ふを得と唱へり此等の議論は公衆か海外殖民地の實況に關する知識を甚しく缺乏せると、殖民地か英國貿易の上に於ける位地の何ものたるか、英國か數十年來何人にも脅かれざる世界的強國の地位の基礎か何に存するか、を知らざると同時に、一般に殖民地は其發達の或程度に於て必ず本國より獨立するものなりとの迷信の行はれたるに依り大に耳目を聳動せしめ、加之當時其勢力盛なりし自由貿易論か大に殖民政策の無價値を稱道したるに依り當時殖民地方面に於ける政費の支出に對して甚しき不人望を見るに至れり

議員「イ、ア、レーベック」は千八百四十九年に殖民地不要論を唱へて曰く、我殖民地を以て不必要なる負擔なりとするの學者及政治家は近時漸く其數を増せり此等の論者は殖民地を以て帝國の出費多く且危険なる附屬物なりとし唯一種の

自尊心と特別の謬想とが強て殖民地の必要を叫はしむるものなり、洵に吾殖民地は帝國か他國に對する永久なる爭議の源泉にして實に政費の濫費を招く所の主因なり、故に一の殖民地をも有せざるに至ることは寧ろ殖民地を維持するか爲めに永く不愉快を忍び多額の政費を負擔するの愚に比して大に優れるものありと、此見解は四十年—五十年に於ける南「アフリカ」に於ける英國政府の態度に甚大なる影響を與へたり西「アフリカ」問題に付ても亦同一の運命を齎らせり

「ロールド、ドルハム、ゲーワーク、ヒールド、チャレスピルレル、ハー、メリワール、エアール、グレイ、アデルレイ、及ロールドジョンルツセル」等は海外の殖民地には能ふ限り大なる政治上の自由と無制限なる自治とを附與し、之に依り殖民地に於ける天然の富源の急速なる發達を促かし其政費は出來得る限り自辨せしめ以て本國の監督及干渉を緩めんことを計るの必要なるを唱へり、「ロールド、ジョンルセル」は千八百五十年に英國は其殖民地を嚴格に維持することは其天職に對するの責務なりと宣言せり、殖民地は本國の勢力の一部を爲し其本國の貿易に

對して安全なる港灣と確實の保證とを供給するものなり若し夫れ殖民地の拋棄を主張する論者の如きは其拋棄したる殖民地か直に他國の占握に歸するを思はざるものなり、夫の殖民地か一朝人口と富力とに於て強盛を致すときは必ず其本國より獨立するに到るとする見解の如きは甚たしき謬想にして、畢竟此恐怖心か常に英國をして其殖民地に自治を附與して其全盛を齎らんとするの行動に大なる妨害及制止を與ふるものなり、吾人は常に世界の幸福の爲に活動するの慰藉を保有するを要すと、彼は議員黨派の「ジョンブライト」の質問に答へて曰く若し榮譽に富む尊敬すべき議員諸君か英國をして世界強大國の位地より一小弱國の位地に墮落せしむるを欲するにあらざれば、必ず殖民地不要の妄見に賛成せらるゝことあらざるへしと、大に其殖民地經費の大削減に對して辯駁を試みたり

五十年の終六十年の始に於て自由貿易論者の勢力其頂點に達したる時に當り、自由黨の發言者は英國か其殖民地に關し全く従前の態度を根本的に一變し且印度の一揆の未だ瀰漫せざるに先ちて自由貿易の原則と牴觸する一切の殖民

政策を根本的に廢棄すへきを請求せり、千八百五十七年に「コブデン」は其友人に書を送りて曰く、余は我英國か亞細亞に於ける數億の人民を支配せんことを企てたるべき實に其不能の企計を試みたるの勇氣に驚けり、神及自然の理法は此の如き計畫に對しては必ず打勝ち難き障害を爲さんことを信するものなりと、又彼は「ジョンブライト」に發表して曰く、若し英國か亞細亞大陸上に「ニエークル」の土地をも有せざるに至らば是れ實に英國の大幸福なる時期なりと、最も不仁なる嚴酷を以て印度兵の徵發を壓制したる政府の態度に關しては「コブデン」及其黨派は甚しく反對を試みたり、之に依り英國人民の品性を墮落せしむること恰かも希臘人及羅馬人か亞細亞の占領に、依り總ての權利及風紀の標準を失ひたると同様なりとせり、「コブデン」は千八百六十五年に「カナダ」の占有は實に英國と北米合衆國との關係に付永久の危害を齎らすものなり、若し英國か米國との間に戦端を發したる場合には「カナダ」の維持は甚た困難なり、故に英國及「カナダ」双方の利益に於て速かに其政治的結束を解消し單純なる貿易關係のみに制限するは最も得策なりとせり、同一の見解は「ジョンブライト」も之を有し

千八百六十七年議會に於て演説して曰く、速かに「カナダ」殖民地に完全なる自治を與へ其英國との間に從來の關係を持続すへきか又は獨立を宣言すへきかは一に「カナダ」政府の完全なる自由採擇に任すへし、若し「カナダ」政府が北米合衆國に合同せんせは亦之を制限するを要せずと、此議論の極端なる代表者は「プロフェネル」ゴルトウインスマスにして、千八百六十三年に英國が殖民地を併合して一大帝國の聯邦を現出せしめんとするは全く將來の夢想談にして現在に於ける危険なる謬想なりと斷定し、「カナダ」が一日も早く英國に對する分離の必要を眞面目に主張せり

此の如き思想は民黨派の政治家の容れざる所にして、西「アフリカ」の殖民地が其氣候の不良なる爲めに無数の人命を犠牲にし又土人との永久的戰闘が著しく英國の國庫を悩ましめたるに當り、屢其放棄を主張するの論者を見たるに拘はらず彼等は行政の簡易と現在の占領地の不擴張とを以て満足せり、又進歩せる殖民地に對して完全の自治を確認するは其英本國に對する分離を獎勵するものなりと確信せり、千八百七十二年に「ヂスレリー」は所謂殖民地拋棄論は其

あらゆる知識、活力及熟練を以て國家の解體を力むるものと云ふへし、今日に於ては此議論は却て英國の政策を弱むるものにあらずして却て一層強硬ならしむるものなりと云へり

英國が其殖民地に完全の責任を有する政府を置くことを許容したる結果は自ら英國本國の軍隊を其地方より歸還せしむることゝなれり、何となれば英國殖民地に於ける軍隊は其殖民地の防備の爲にするものなれば之を其本國の負擔とするは甚た不當と云はざるへからず、此に於て千八百五十九年に議會の委員は當時英國本國は毎年殖民地の軍隊の爲めに三百九十六萬八千五百「ポンド」を支出するに拘はらず殖民地は僅に其三十七萬八千二百「ポンド」を負擔するに過ぎざるを明にしたると、同時に一旦緩急あるときは其殖民地に於ける防備は未だ決して十分なりと云ふ能はざることを確定せり、千八百六十一年に於ては議會は完全の自治權を獲得せる殖民地は其防備を自ら行ひ且其經費を負擔すへきの當然なることを決定せり、千八百六十二年に下院は之に關して現實に決定を爲し一、二の殖民地の反抗に拘はらず次の十年に於て此原則の實行を計りた

り、即ち殖民地に對しては十分なる費用の負擔を爲すものに限り本國より英國兵を派遣するものなりとするの原則を立てたり、濠洲の如きは其防備に必要な艦隊すら漸次に自ら維持負擔すべきことを決定せり、斯かる主義は其本國と殖民地との連鎖を危からしむるものなりとの恐怖は全く犯憂に屬せり、殖民地は之に依り自己の軍隊又は民兵を以て其中心とし従前の如く英國本國軍隊又は其指揮官との間に争擾を見ることなきは其甚た愉快に感せしむる所なりき、是れ實に民黨議員が英國の殖民地行政上に關する盡力の一成功と謂ふべきものなり

殖民地を軍務省の下に置きしは英國の革命戰爭中は止むことを得ざる現象なりしと雖も、終に不良の結果を伴ふことを免る能はざりき、即ち屢交迭せる陸軍大臣は殖民地事務に關して十分の知識及十分の利益を有せず、曾て「ロールトデルビー」は之を評して各殖民地と戰闘中の本省なりと云へり亦其狀況を推するに足る、諸般の亂雜且不要なる又は錯誤せる支出が繰返されたるも、幸ひ皆軍事非常支出費中より内密に費消し去れり、若し殖民地に關して出來得る限り

僅かに聞かんとせば此制度は最も適當なり、曾て「ロールト、バトハースト」は其告別に來りし總督に告て曰く、健康に赴任あれよ吾信愛する僚友よ出來得る限り吾人をして殖民地に付ては僅かに聞かしめよと即ち其一例なり、軍務省に於ける秘密を重するの習慣及原則は甚た僅少の殖民地の關係に適當せり、此の如くして此の間には文官と個人の自由とは著しき壓迫を被むりたり、殖民地事務を軍務省に合同の結果は他方面に於て當時の軍務省に非常の勢力を扶植せしめ、議會の一の黨派も好て其變更を企つる能はざるの權威を軍務省の上に占握せしめたり、千八百五十四年に至り漸く二者の分離の必要を決定し特に拓殖務省を新設せり、次て其絶へず政變に伴ひ交迭すべき拓殖務大臣の下に常置的の常任次官を設置したること、殖民事務の措置に關して最も適應せるものと謂ふべく、爾來英國の海外殖民地に向て甚大の裨益を與へたり

英國人民の大多數は其殖民政策に關して決して一、二の政治家の議論に従ふことを爲さずして、却て殖民地占領の必要を確信し其殖民地喪失に導くべき各種の政策を一切否認せり、又自由貿易論の勝利も國民の上に於て其殖民政策上の

觀念の變動を爲さしめさりき、此に於て國民の大多數は益殖民政策の發達と殖民地と本國間の深密なる連鎖の確立を要望し、殖民地の放棄又は移轉は絶対に之を希望せざりき、而して亞米利加の革命前に發達せる思想たる各殖民地が英國議會に一人又は數人の代表者を送ることは最も國民多數の歡迎する所なりき、唯之に關しては亦左の有力なる反對説あることを記憶せざるべからず、即ち若し殖民地に於て英國本國の議會の外に別に各殖民地の議會を存立せしむるものとせば、現在の狀況に格別の變動を加ふるの必要なものとす、之に反し總ての殖民地議會を廢止して英國本國の議會にのみ服従せしむるものとせば、始て本國議會の代表の問題を生ずるものと云ふべし、唯此結果は却て殖民地の行政をして官僚派の手中に握らしむること、爲り却て發達したる殖民地より抗論異議の發生を促すに至るべし、ハ、メリワール、アデルリー、及ウエークヒールドは盛に此の如き計畫に反對せり、ウエークヒールドは舊制度に復し各殖民地よりは一人の代表者を倫敦に駐在せしめ其利益を中央に代表せしむるを可とし、其他に於ては本國の干渉を唯政治上、軍事上、通信制度上已むを得ざるもの

及王領地の處分にのみ制限せんことを希望せり

千八百四十年の始に大佐トルレンスは獨乙の關稅同盟の結果に刺戟せられ、英國と其殖民地との間に完全なる關稅同盟を作らんことを企て、戰鬪的關稅に依りて諸外國をして英國の關稅同盟に對して稅率上完全なる相互主義を執らしめんことを迫らんとせり、此の發議は民間の當業者より大反對を受けたり、メリワールは戰鬪的關稅は英國の貿易及工業に損害を與ふるものにして却て外國の生産地方を挑戰者の負擔を以て特に保護するの結果を見るに至るべきを證明せり、又殖民地の關稅同盟を最も廣き根柢の上に作らんは左程の困難にあらず、獨立國か其同盟に加入するを避けざるは明なりと雖も、若し關稅同盟中の一、二のもの、物産のみに關稅の保護を與ふるとせば其利益を享受するは唯殖民地の上のみに止まり、却て英國本國の工業家及消費者は大なる不利を受くるに至らんことを説明せり

英國に於ける自由貿易政策論者の完全なる勝利は、英國と殖民地との連鎖を強固にせんとするの計畫を政治上に於ても又經濟上に於ても一切排斥して其殖

民地に完全なる自由を與ふるを主眼とし、關稅制度の如きは全く土地の實際の必要に依りて各別に定むべきものとせり、即ち西印度及カナダが米國と特別の條約を締結し英本國の物産を米國品よりも劣等の取扱を爲すことを許容し、又濠洲各聯邦が相互に戰鬪的關稅を課して其產物を英國の產物よりも特に保護するの規定を設くるを制限せざりし如きは其例なり、而して責任ある政府の設置を許されたる殖民地に在りては本國との連鎖は本國より送られたる總督と殖民地より倫動に派出せる代理官とに依りて保たれ、唯政治上及軍事上に於てのみ英本國が特に其指導を爲すものとせり。

獨乙國が殖民國の列に加はりたることは英國に對する一箇の大刺戟と爲り、同時に保護貿易主義の勢力が各國に大に振起し殊に北米合衆國が保護貿易主義を採用したるより、英國に於ては千八百八十年以來殖民地と本國との連鎖を緊密にせんとするの希望盛に起れり、蓋し殖民地は其本國の武力を強大にするの原因を爲すのみならず、本國の各種工業上の產物を消費すると同時に本國に對して其必要なる原料品及食料品を供給するに於て莫大の利益を有し、英國は實

に殖民地を有するに依り他國の關稅政策に對して善く獨立の行動を爲すの自由を有するものなればなり、倫敦商業會議所は千八百八十五年三月政府に向て關稅同盟の問題を綿密に研究し殖民地を此問題の實地試驗に供すべきことを提言せり、千八百八十六年の始には凡ての殖民地の需要に適應する關稅同盟の一新案を作り、同年の夏に於て英國商業會議所會議を當時開會中の殖民地博覽會を機とし倫敦に於て開きたり、其結果として殖民地政府は相互に其意見の交換を始め千八百八十七年四月四日には倫敦に於て各獨立の殖民地及重要なる王領殖民地より代表者を參列せしめ一の會議を開くに至れり、ロールド、サリス、パリは此問題は現在の爲めにするより寧ろ將來の爲めに頗る必要にして今日には此思想は甚だ漠然の觀あるも漸く年月の経過と共に明確にして争ふべからざる觀念と爲り數多の實際上に幸福なる効果を發現するに至るべしと、演説し戰時に於ける本國及其貿易の保護及本國と殖民地との經濟上及社會上の關係の發達とを先づ交通機關の發展進歩に依り促進すべきことを評議に附したり、此時に當り「クインズラント」及喜望峯殖民地の代表者は完全なる關稅同盟は

未だ其時期に到達せざるも、凡ての殖民地に於て英國産の物品を他國品よりも關稅上特別の利益を附與すへき關稅同盟を實行するの必要あるを唱道せり此發議は各殖民地中獨り「ニューサウスウェルス」及「タスマニヤ」を除くの外は皆贊成を表せり、此議論は議會の少數委員か當時英國の經濟上の位地を研究して殖民地の物産を英國に輸入する場合及英國の物産を殖民地に輸入する場合に於て特權を交付すへきを論ずるものと能く適合一致せり

英國の貿易業者界は此計畫に對して大なる故障を申出て曰く、此計畫は英國の世界市場に於ける卓越の地位を其基礎に於て大動搖せしむるものなりと、彼等の勢力は終に此の特別附加關稅の思想を根本より排斥し、千八百八十九年には明に之を實行すへからざるものと宣言するに至れり、殖民地に在りても人民の多數は之に對して僅かの同情を有せり、濠洲に於ては寧ろ殖民地のみに於て親密なる商業政策上の團結を求むるを要すとし、唯「カナダ」に於てのみは北米合衆國の貿易政策に對して武器を執らんことを熱望するの結果、特別附加關稅の思想に大贊成の意を表したりき、「カナダ」政府の少なからざる盡力を以て千八百九

十一年に更に殖民地會議を召集して英國貿易の發達に關する評議を爲すに至れり、議會は之に對して何等かの發議を爲すを避けたるも、總理大臣「ロールド・サリスベリー」が原則として外國品に對しては戰鬪的關稅を課し英國の物産には特別の保護を與ふるの考案を宣明したるに依り、大に其會議の運動者側の満足を買ひたり

「サリスベリー」の内閣の崩壞は忽ち英國に於ける殖民地の聯邦的同盟運動の希望を長き時に向て終を告げしめたるも、倫動商業會議所及「カナダ」政府よりは尙ほ熱心に之を唱道せり、千八百九十二年に英國議會は假令無益に止まりしとは云へ、現行通商條約中最惠國條款の削除を申出たり、同年に英國商業會議所の第二回會議が開かれたり、千八百九十四年に「カナダ」の發議に依り「オタツワー」に於て凡ての自治權を有する英領殖民地の代表者の集合を見たり、此會議に於ては英領殖民地の連鎖の緊接を力とめ英國の物産を外國品の前に特に保護するを以て最も必要なりとせり、此刺戟は無效果に終はれりと雖「カナタ」人は尙ほ米國の貿易政策に對して關稅規則に依り從來よりは效果の多き抗擊を加へんとす

るの努力を怠らざりき、即ち千八百九十七年に「カナダ」の産物に限り全く無税とし、唯外國品に對しては特別の關稅上の特權を與ふることを得るを決定せり、此決定は英國か自己及其殖民地の爲に獨乙及自耳義に對して負擔せる義務に衝突するものなり、千八百九十二年には其現行條約の廢棄の請求をも拒絶せられたり、此に於て千八百九十七年に「ロンドン」に開かれたる自治權を有する殖民地の政府代表者の會議に於て、種々の規則か切迫して決定せらるゝを見たり、當時の殖民大臣「チャムバーレン」は其會議に於て英國の本國と殖民地の政治上及經濟上の連鎖を緊密ならしむる問題に關して大に説明する所ありしも、殖民地の政治家の多數は其政治上よりしても、亦其行動の自由の一部を拋棄する上よりも現狀の變更を好む所にあらざるを明白に發表し、唯地理上及經濟上の側より其連鎖を密にするの方案を聞かんことを求めり、軍事上の側に於ける大なる犠牲を負擔するは固より亦其欲する所にあらざりき、關稅同盟の問題に關しても亦一般に賛成の意を表するものにあらず、此に於て其全部の計畫は再び廢棄せられ、此問題か其實行に關しては種々の妨害を有し、單に貿易統計表上のみ

より速斷し得る如き平易のものにあらず、諸種の利害上衝突を有する大問題たることを分明にせり
英國の貿易統計を擧ぐれば即ち左の如し

(一) 英國の總輸出入

年次	入	出
千八百九十年	四二〇、六九二、〇〇〇	二六三、五二二、〇〇〇
千八百九十一年	四三五、四四一、〇〇〇	二四七、二三五、〇〇〇
千八百九十二年	四二三、七九四、〇〇〇	二二七、〇七七、〇〇〇
千八百九十三年	四〇四、六八八、〇〇〇	二一八、〇九五、〇〇〇
千八百九十四年	四〇八、三四四、〇〇〇	二一六、〇〇五、〇〇〇
千八百九十五年	四一六、六八九、〇〇〇	二二五、八二〇、〇〇〇
千八百九十六年	四四一、八〇九、〇〇〇	二四〇、一四六、〇〇〇

(二) 殖民地輸出入

年次	殖民地よりの輸入	殖民地への輸出
千八百九十年	九六、一六一、〇〇〇	八七、三七〇、〇〇〇

千八百九十一年	九九、四六四、〇〇〇	八五、九五六、〇〇〇
千八百九十二年	九七、七六六、〇〇〇	七四、六三〇、〇〇〇
千八百九十三年	九一、七六九、〇〇〇	七二、〇一五、〇〇〇
千八百九十四年	九三、九一二、〇〇〇	七二、六四五、〇〇〇
千八百九十五年	九五、五三〇、〇〇〇	七〇、〇〇二、〇〇〇
千八百九十六年	九三、二〇八、〇〇〇	八四、一三七、〇〇〇

三八四

英國と殖民地との貿易は英國の總輸出入貿易額中の中庸部分を占めり英國と諸外國との貿易を之に比すれば遙かに優るものあり即ち左の如し

(三)英國と諸外國との貿易額

國 別	千八百九十五年		千八百九十八年	
	入 (ポントステイリング)	出 (ポントステイリング)	入 (ポントステイリング)	出 (ポントステイリング)
米 國	八六、五四八、〇〇〇	二七、九四八、〇〇〇	一〇六、三四七、〇〇〇	二〇、四二四、〇〇〇
佛 國	四七、四七〇、〇〇〇	一三、八七〇、〇〇〇	五〇、一〇四、〇〇〇	一四、一五一、〇〇〇
獨 逸	二六、九九二、〇〇〇	二〇、五八六、〇〇〇	二七、五八五、〇〇〇	二二、二四四、〇〇〇
和 蘭	二八、四一九、〇〇〇	七、三七五、〇〇〇	二九、二六一、〇〇〇	八、三三三、〇〇〇

英國の殖民地は現在に於て印度を除くときは大體之を三種に分別す

第一、王領殖民地(クロンコロニー)

英國の本國政府が其殖民地の上に直接に立法權及行政權を行使するものにして之を分ては亦左の三者と爲すことを得

- (一)「デブラルタル」「サントヘレナ」等にして茲に在りては總督が全權を掌握し法律も亦總督に於て自由に發布し得るものなり
- (二)「セイロン」「マウリチウス」「香港」「ラブアン」「トリニダー」「サントルチャ」「ヒジー」等にして茲に在りては總督の傍に皇帝の勅選に係かる委員を以て組織する評議會(カウンシル)を置くものなり
- (三)「ジャマイカ」「海峽殖民地」「シルラレナー」「ガムビヤ」「ゴルドキユースター」「ラゴース」「グラナダ」「ファルグランド」「ホンドラース」「サントウインセン」「トバゴ」等にして茲に在りては本國又は殖民地の法律に依り組織せられたる評議會を有す

第二、殖民地議會を有するも、未だ責任ある政府を許されざる殖民地

茲に在りては英國の本國政府は行政權に付ては十分の監督及干涉を爲

し得るも、立法權に付ては唯否認權を有するのみとす之に屬するものは「バハマ」「バルロドース」「ベルムダ」「英領グイニヤ」「レワード」「マルター」「ナター」「西部濠洲等なりとす

第三、殖民地議會及責任ある政府を有する殖民地

英國の本國政府は此殖民地に對しては立法權に付ては唯否認權を有し行政權に付ては總督以外の官吏の監督權を有するのみとす「カナダ」「喜望峯殖民地」「ニューファンドランド」「ニューサウスウエールズ」「ウイクトリヤ」「クインズランド」は之に屬す

殖民地の最高の指揮は倫敦に於ける殖民省の管轄とす、殖民省には殖民大臣を置く其下に議會專務の次官あり、其下に一人の常任書記官、三人の補助的書記官、一人の書記長、六人の主任書記、六人の第一級の書記、十三人の第二級書記を有す其他多數の圖書係、計算係及登記係あり、印度の事務に關しては別に印度省ありて之を指揮監督す

第三節 佛國殖民政策論

本節は千九百一一年發行「チムメルマン」氏佛國殖民地論中より抄譯するものにして亦蘭領東印度を研究する者の參考に資せんとするに外ならず

佛國革命前に於ける數世紀間の佛國殖民政策は全體に於て他國の殖民政策と僅少の差異を有するのみ、即ち「スバニヤ」「ポルトガル」「英國及和蘭」と同一の立脚點に於て大差なき方針及手段を以て其歩を進めたり、唯其運命は之を他の殖民國に比し良好と云ふ能はさりき、佛國政府が數世紀間に其殖民地に設立したる數多の特權會社は概ね皆其目的を達したるものなかりき、本國は彼の會社に依り殖民地の爲に直接に外交上の混亂を惹起することを避け又直接に租税を以て其經費を支拂ふの負擔を免れたるも、同時に會社の爲に其殖民地をして國家に向て永久の混雜及犠牲たらしむるの原因を爲せり、個人の企業心及活動は會社の爲めに獎勵せられずして抑制せられ最も弊害多き後見監督的束縛の發現を促せり、而も其結果は政府が會社に對して授與したる特權を更に高價を以て買

戻すに依り漸く會社の損失を免れしめたるに終はれり、英國か東印度會社又は「アドソンベイ」會社、和蘭か東印度會社を以て示したるか如き成功は全く之を認むること能はざりき、佛國の殖民會社は官僚的行政に附帶する各種の缺點を具するのみならず、小商人的短見及狹量並に破産投機者的の輕忽等凡ての短所を發露せり此の如くして十八世紀の終に至る凡ての可憐なる經驗か、特權會社に依る殖民主義の信用をして佛國政府より全く消滅せざらしめしと、近時に至り再び特權會社に依る殖民を眞面目に主張するものありしは實に健忘的の甚しき不思議の現象と云ふべし、此特權會社に依る殖民の失敗は他の殖民國に於ても明に認めらるゝものにして、大體に於て特權會社主義か不幸なる結果を齎らすへきは争ふへからざるの事實なる如し

殊に佛領殖民地に於ける失敗は、宗教上の熱狂に大原因し之か爲めに多大の犠牲を拂ひたるものあることを認む、此事實は一定の程度までは各國に見るものなりと雖他の殖民國は宗教上に於ては佛領殖民地の如く狹量なるものにあらずさりき、佛國及「ピレネエン」半島の諸國か舊教信徒の反對者を迫害したるときに

當り英國及和蘭は舊教信徒の反對者を全く寛恕せり、「ニューエングラント」に於ける宗教の熱狂者は他の宗教信者を決して殘酷に迫害せざりき、英本國の宗教上の立法は近世に至るまで甚た狹量の規定を有せしと雖も、英領殖民地に於ては其本國の規定を殆んど無視して異宗教者を寛大に待遇したるは、佛國と大に異なる所にして眞面目に殖民地の内政の改良に努力し佛國式の嚴重なる羈束及干渉を求めざりし點に於て、英領殖民地は順調の發達を遂げたりき、佛領殖民地に於ては之に反し官吏及兵卒より常に本國の條規に對する柔順を強制せられ、始よりして之に對する不平不服の聲の各所に呻吟するを聞けり、而して終に獨立及自由の精神は全く殖民地に於て壓服せられたり、是れ佛領殖民地か英領殖民地と非常の相違ある所なり

然れども佛國人は殖民地を所有するの能力なしと評するは甚た不當と謂はざるへからず、尙ほ今日と雖も佛國の失ひたる殖民地に於ては依然として佛領殖民地の性格を保有せり、即ち「カナダ」「ルイジヤナ」「マウリチウス」「ハイチ」等に於て佛語及び佛國風の特徴か驚くへく明白に現存して失はれざることを認む、佛國

人は近時に於て確認せられたる如く常に其殖民地の上に特別の印象を彫刻するに關し稀有の熟練を有せり、唯惜むらくは、其殖民地に於て良好なる佛國人の特性と共に其劣悪なる短所を齎らし移せり、之か爲めに白人の移住をして英領殖民地に於ける如く同一の標準を以て増加せしむる能はず、從て其貿易及商業も英領殖民地に於ける如く活潑且有力なることを得ざりき、故に佛國人か外部の事情に依り其短所を取除くべく迫られたる所に於ては、佛國人か超越して殖民に適當せるものあるを證明せられたり、即ち喜望峯殖民地に於ける佛國新教信徒の殖民の結果に付て想起せは思半はに過ぐるものあるへし

佛國殖民政策の大缺點は實に佛國の海外殖民地か十八世紀の後半に於て見舞はれたる災害にありと云ふへし、之に關しては佛國に於ける海軍力の缺乏は大に責任を有せり、當時英國か容易に佛國の最も重要なる殖民地を占領し立るに海上の支配を占め得たるものは、實に佛國の海軍か勢力を有したる場合に於ては決して之を望む能はざるや極めて明なり、佛國は其最も重要なりし決戦期に於ては必要なる戦艦及優良の構造と十分の準備を了せる船舶とに於ては決し

て英國に劣るものにあらずき、唯佛國及「スペイン」に於ては船上に於て責任の地位に就ける人物に適任者を得ざりし事實あり、最れ實に其大敗を齎らしたる大缺點と謂ふへし、「ナポレオン」は其陸軍に於ける如き適當の天性的の良士官を海軍の爲めに養成する能はざりき、英國は之に反し良士官の養成と其選抜に關しては佛人に比し非常に卓越し、其海軍大士官としての天性及天才は洵に英國をして世界海上權を支配するに至らしめたるの大原因を爲すものなり

今日の佛國殖民地は「ルイ」十四世と共に生まれ、其地理上の關係又は其行政若くは經濟上の關係に於ては從前の殖民地と大に異なれり、其殖民地の中心は今唯「アフリカ」と東方亞細亞とにあるのみ、其行政も從前の後見的干涉政策に代ふるに革命時代より始めて企てられたる英領殖民地の制度を參酌したる自治行政主義の漸次的發現を以てせり、何人も現時の佛領殖民地の發達及其現狀を綿密に研究するときは、過去の世紀に於て佛國殖民政策の特徵たりし短所は大半其跡を消滅せることを認む、政府は其交迭毎に常に一定の確定不動の政策を引繼ぎ、過去の佛人の常習たりし不耐及短氣は今日は僅かに稀に之を認むる

のみ、固より今日と云へとも細密にして鋭敏の研究を爲すときは、其行政の不秩序、遲鈍及官僚的なる、文武官の軋輓、陸海軍の暗闘、保護的經濟政策等に關し少なからざる不平、及苦情を耳にし、又殖民地に於ける貿易及工業の發達の程度に比し、毎年の政費は過多の嫌あることを認むるものありと雖ども、大體に於て佛領殖民地は現在に於て頗る順境にあり其前途の發達亦頗る好望なるを忘るへからず、之に關しては其殖民地に於ける貿易の發達か之を證するに餘りあり「アルゼリー」及「トニス」は元來の殖民地と云ふへからず、故に之を除き其他の殖民地に付て其輸出入の狀況を示せば左の如し

年次	入	出
千八百八十一年	一二四、六一五、九〇〇	一四一、〇九〇、九〇〇
千八百八十五年	二四六、七〇七、七〇〇	二二八、〇二九、二〇〇
千八百九十年	二二〇、七九二、一〇〇	一九一、九八七、七〇〇
千八百九十五年	二四一、四八三、一〇〇	二三三、四六四、三〇〇
千八百九十七年	二五六、八〇六、五〇〇	二六三、七一〇、七〇〇

次に佛國に於ける總貿易額を擧ぐれば左の如し

年次	入	出
千八百八十五年	四、九三〇、〇〇〇、〇〇〇	三、九五五、八〇〇、〇〇〇
千八百九十年	五、四五二、四〇〇、〇〇〇	四、八四〇、二〇〇、〇〇〇
千八百九十五年	四、九一九、六〇〇、〇〇〇	四、五八九、三〇〇、〇〇〇
千八百九十九年	五、八四八、〇〇〇、〇〇〇	五、五三三、五〇〇、〇〇〇

佛國と其殖民地との貿易額（アルゼリー及トニスを除く）を擧ぐれば左の如し

年次	入	出
千八百八十一年	五一、二七九、七〇〇	九八、一四三、二〇〇
千八百八十五年	一〇〇、四三九、七〇〇	九六、六八五、八〇〇
千八百九十年	七〇、九〇三、九〇〇	一〇〇、八四五、八〇〇
千八百九十五年	九一、七〇八、六〇〇	一〇二、四六八、七〇〇
千八百九十七年	一〇九、七六二、四〇〇	一〇五、九五〇、八〇〇

佛國と總ての海外領地との貿易總額を擧ぐれば左の如し

年次	入	出
千八百八十五年	二八八、八〇〇、〇〇〇	二八六、四〇〇、〇〇〇

千八百九十年
千八百九十五年
千八百九十九年

三七八、五〇〇、〇〇〇
四三〇、一〇〇、〇〇〇
五〇三、五〇〇、〇〇〇

三九四
三四四、四〇〇、〇〇〇
四二七、七〇〇、〇〇〇
五六六、四〇〇、〇〇〇

以上の統計に依れば殖民地の貿易總額は繼續して毎年増加の跡あるを認め其殖民地と本國との貿易關係亦同一なり佛國が殖民地の爲に要する經費を之れと對照比較するときはその經費の總額及毎年の増加進度は必しも過分なりと云ふへからざるを認め即ち「アルゼリー」及「トニス」を除く外の殖民地の歳出豫算を擧ぐれば左の如し

千八百八十四年
千八百八十五年
千八百八十九年
千八百九十年
千八百九十四年
千八百九十五年
千八百九十九年

三二、六一九、五〇〇
三四、四二〇、八〇〇
五五、八一四、五〇〇
五二、六一五、〇〇〇
七三、〇四〇、八〇〇
八一、八八九、一〇〇
九〇、七九四、八〇〇

千九百年
千九百一年

一〇六、四九三、四〇〇
一〇三、五一七、六〇〇

然れども從來の殖民地の成績は未だ一般の満足を得るに至らずして、毎年佛國の議會に於ては盛に政府との間に原則的に議論を闘はすを見たり、是れ實に佛國が近時殖民地問題に關して眞面目及誠意を用ゆるの大なるを證するに足るものなり、議會は殖民地の政費節減を急迫して要求するのみならず出來得る限り其本國に齎らす利益の大且多からんことを希望せり、即ち軍事費の大制限と同時に各方面の要求に従ひ刑罰的殖民地の發達に依り其人口の増殖を求めたり、然れども之に關しては有力なる反對説が大勢力を以て其多數を支配し、佛國の勢力は一に軍事方面の大活動に待つとするを政府の確定なる意見とするを以て、軍事費の節約の如きは到底實際問題と爲ることを得ざるなり、遂に千九百年に於ては殖民地軍隊に關する法律を定め、凡ての現在の殖民地軍隊を其殖民地軍隊に編入して之を定制とするに至れり、此に於て此法律と及殖民地に出來得る限り陸海軍の強力なる支柱を見出さんとするの盡力とに依り殖民地軍事

費の増加の止むことを得ざるを認めたり、此事情の下に殖民地の民政費に大削減を加へ其殖民地の収入か支辨し得る限度に之を止め其本國をして非常に其過重を感せしむるの負擔を全く除却せんとするの發議は、屢提出せられたるも其實行は疑問に屬し容易に其出現を見る能はざりき、而して本國に對する殖民地の經濟的價値を高むる爲には却て反對の提案の促かされたるを見たり、第二の帝國時代迄は佛國本國は任意に其殖民地の經濟的關係を定むるの權利を保留して、殖民地の產物には關稅を賦課するに拘らす本國の貨物には全く無稅の取扱を爲せり、唯一、二の特別の必要なる殖民地の物産に限り特別の關稅上の特權を附與したるのみ、ナポレオン三世の時に當り英國との條約に依り此主義を根本的に變更したりと雖も、之れ迄に其附與したる關稅上の特權は甚だ多數となれり、千八百六十年の始には佛國殖民地産の砂糖は外國産の砂糖と關稅上同一に取扱はれ、其他の殖民地産物も亦皆從來の特權を奪はれたり、此くの如くして佛國は殖民地に於ける多數の關稅特權を抛棄して外國貿易に向つて全く自由なる門戸を開放せり、然れども其殖民地に對する貨物運搬に關する佛國の

海運上の特權は尙ほ暫く殘存せり、然るに千八百六十一年には佛國と「アンチルレン」及「レウイニオン」との航海を、千八百六十九年には凡ての殖民地に對する航海を全く開放して自由とし、唯一定の手数料を賦課するに止め、千八百六十六年七月四日の元老院の決議は、重要なる殖民地の物産に對する凡ての關稅上の特權を廢止し、之に代ふるに外國品の課稅率を定め得るの權利及凡ての貨物に入市稅を課するの特權の取得を以てせり

此法律は佛領殖民地に於て種々の關稅主義を執らしめたるも、漸く外國品の取扱をして佛國品と全く同一ならしむるに至れり、千八百七十二年に佛國は再び關稅に付き國旗稅を採用せしも、唯殖民地より來る船舶のみは之を除外せり、千八百八十年に於ては更に佛國殖民地産の砂糖には外國産に比し特別に關稅上の特權を附與したるか、其結果は佛國本國に於ては殖民地は毫も本國に特別な利益を供與せざるものなりとの苦情を盛に唱へらるゝに至れり、政府は之れか爲に殖民地に壓抑を加ふるの止むを得ざるを認め、千八百八十四年より其稅率を本國の利益に迄變更せり、此等の事情は千八百九十年の始に權力を得たる

「メリネル」黨の希望に一切適合せずして、終に其運動及盡力に依り千八百九十二年一月十一日の法律は關稅關係に完全なる改革を企てたり、即ち「グナデロップ」「マルチニツケー」「サントビルレー」及「ミクエロン」「ガボン」「ロイニオン」「マヤツテ」「印度支那」「ニエーウエルレー」「カレドニヤ」等に於ては佛國本國の稅率か僅少の變更を以て其儘外國品に適用せられたり、是れ「アルゼリー」に於ては千八百八十四年より已に實行せるものにして佛國の貨物には全く免稅の特權を與へたり、其他の殖民地に向ては之れと多少異なる所の稅率か行はれ、佛國產の貨物は輸入に際し外國品よりは多くの利益を附與せらるゝことゝ爲れり、凡ての殖民地貨物は佛國に輸入する場合に於ては毎年定むる所の數量稅を課せり此稅率は外國品に賦課するものゝ半にも達せざりき、他の殖民地への輸入に付ては全く免稅せしめたり、殖民地の評議會の權限は千八百九十三年に制限せられ當該殖民地の稅率を正當に判斷し可成佛國に利益を與ふるの希望を満足せしむるを要すとせり、此立法は佛國の保護關稅主義者に満足を與へざりき、メリネル」及其黨派は再び十八世紀の主義に復歸せんことを力とめたり、且殖民地に於ける各

種の工業の成立及發達をして其母國との競争を避けしむる爲に相當の立法を希望せり、此目的を達する爲に殖民地に於ける此等の恐るべき事業の上には特別に重稅を賦課せり、又「ポンヂツヘリー」に於ける織物は從來免稅の特權を有したるも爾今は佛國、印度支那及「セネガル」に於て其特權を廢止せられたり、「セネガル」に於ては一般に佛國本國の稅率を施行し各殖民地をして此稅率を輸入すべく刺戟を與へり、又佛國品に付ては外國品と全く同一の取扱を爲すべきことを力めたり、之に對して殖民地の黨派として殖民地の利益を主唱したるは前總督「レ、マイリー、テー、ウイレルス」等にして、殖民地の最も重要な產物は佛國に於て完全に免稅せんことを要求せり、且殖民地に他國の稅率を適用するに代ふるに單純にして其土地の必要に最も善く適應せるものを以てせんことを要求せり如何なる方面に於て其改革か實行せらるゝやは全く佛國の内部關係の發達如何に關連せり、若し夫れ「メリネル」の主唱するものは果して今日に於て過去に於けるより最も良好の結果を現出し得べきやは實に一大疑問なりと謂はさるへからず

第四節 和蘭本國國勢一斑

和蘭本國の國勢一斑は蘭領東印度殖民地を研究する者か必ず先づ知了するを要するものたり故に千九百十年發行「エツクルハルト」氏和蘭王國論及千九百九年發行「マイエル」氏百科字典第十四卷第六三二頁以下に依り左に其大要を略述せん

第一 和蘭國の人口

和蘭の人口は千九百六年調に依れば、五百六十七萬二千人にして一平方キロメートル平均百七十七人の比なり、而して其人口は國內に平均して分配せられ其狀英國又は愛蘭とは大に異なり、其各州の間に大なる厚薄を見ざるは左表に明かなるか如し、而して其人口密度の一平方キロメートル平均百人以下に降るものは唯「ドレント」州あるのみ、南及北和蘭州の如きは已に四百人内外の多數に達せり此點に於て和蘭は歐羅巴の諸強國と全く同一の地位にあり

和蘭國人口表

州別	千八百九十九年	千九百六年	千九百六年の人口密度(キロメートル)
北「アレバント」	五三三、八四二	六〇五、四二〇	一一八
「ゲルデルン」	五六六、五四九	六二〇、三六三	一一二
南和蘭	一、一四四、四四八	一、三一二、九七九	四三四
北和蘭	九六八、一三四	一、〇八六、五三七	三九二
「ゼーランド」	二一六、二九五	二二八、三四五	一一五
「ユートレヒト」	二五一、〇三四	二七九、一八二	二〇二
「フリースランド」	三四〇、二六二	三五七、四二三	一〇七
「オベリーセル」	三三三、三三八	三六九、九三五	一一〇
「グロニンゲン」	二九九、六〇二	三二二、八八八	一五八
「ドレンテ」	一四八、五四四	一六七、三三五	六二
「クムプルグ」	二八一、九三四	三二〇、八三〇	一四五
和蘭全國	五、一〇四、一三七	五、六七二、二三七	一七三

和蘭國の都市に於ける人口を擧げれば

- (一) 五十萬人以上のもの 「アムステルダム」
- (二) 十萬人以上のもの 「ロッテルダム」「ハーグ」「ウトレヒト」

- (三) 五万人以上のもの 「クロニンゲン」ハルレム「アルンヘルム」ライデン
- (四) 二万人以上のもの 「ニムウエゲン」チルブルグ「ドルトレヒト」マーストリヒト「ロイワルデン」ヘロトゲン「ホユシユ」テルフト「ツウラルレー」アペルトール「エンシエーデー」シードアム「デウエンテル」フレダー「ヘルデル」ゴイダー「ツアンダム」

和蘭に於ては獨乙に於ける如く其人口の半は市街地にあり、即ち千九百六年の調に依れば其大市街地に於ける人口總數は二百十二萬二千二百五十一人に上はり、其他の地方に於ては二萬人以下の人口を有する市街を併せ其人口總數三百四十五萬九千九百八十六人を有せり、和蘭の人民を其職業別にすれば其比率概ね左の如し

- (一) 農業、林業及漁業に従事するもの 一七・四プロセント
- (二) 工業及鑛山業に従事するもの 三四・四プロセント
- (三) 商業及交通業に従事するもの 一七・七プロセント
- (四) 陸海軍人 一一・二プロセント

- (五) 其他の公役に従事するもの 五・四プロセント
- (六) 家内の勞務に従事するもの 一〇・三プロセント

和蘭に於ける人口の増加率は毎年其進歩を見る其狀左の如し

千八百八十年	〇・六プロセント
千八百八十五年	一・四プロセント
千八百九十年	一・一八プロセント
千八百九十五年	一・三三プロセント
千九百年	一・四七プロセント
千九百三年	一・五七プロセント
千九百四年	一・四プロセント
千九百五年	一・四九プロセント
千九百六年	一・四四プロセント

第二 和蘭國に於ける原始的産業

今世紀の始に於ける和蘭の土地状態に付て其利用目的より分類して其比率を

舉れば左の如し

- (一) 田地、 二六・四「プロセント」
- (二) 牧場、 三六・九「プロセント」
- (三) 山林、 七・九「プロセント」
- (四) 果樹園、公園及養樹園に使用する土地、 二・三「プロセント」
- (五) 不生産地、 二四・五「プロセント」

中に就て牧場は和蘭に於ける四時の氣候及湿度の關係が極めて牧畜に好適なるの結果として最も有望なる現在及將來を有せり、其他の耕地も概して頗る有利なり蓋し「ライン」河の豊饒なる洪水を以て被はれたる和蘭國の一部は歐洲中最も肥沃なる地方に屬し或意味に於て「ナイール」の洪水地方と比較すべきものなればなり、此等の地方は「フリースランド」より「ゼーランド」に至る海岸一帯の地にして茲には盛なる田園の開拓を見たり之に反し山林は和蘭に於ては甚た頽廢し唯「デルデルラント」及「リムブルク」の二州に於て稍や廣大の森林の存在を見るのみ、小麥、裸麥及燕麥等は最も重なる穀類産物にして今和蘭に於ける重なる耕

作物の耕作面積及其收穫率を舉れば即ち左の如し

種別	耕作地面積(「ヘクタール」)				「ヘクタール」に於ける收穫(100リットル)			
	自一八七二年至一八八〇年	自一八八〇年至一九〇六年	自一九〇六年至一九〇七年	自一八七二年至一八八〇年	自一八八〇年至一九〇六年	自一九〇六年至一九〇七年	自一九〇七年	
小麥	八六・三	六六・三	五八・八	三三・〇	三三・九	三三・七	三三・五	
裸麥	一九・二	二〇・七	二二・〇	一七・三	三三・〇	三三・一	三三・一	
冬麥	三・七	三・六	三・三	三九・〇	四一・六	四一・八	四一・一	
夏麥	三・〇	一・六	一・八	三六・八	三三・一	三三・七	三三・八	
燕麥	二・二	二・八	二・九	三六・三	三三・二	三三・七	三三・九	
馬鈴薯	一・三	一・五	一・六	一八・〇	二九・〇	二九・〇	三〇・〇	
蕎麥	一・三	一・五	一・六	一七・四	一八・〇	一八・四	一七・八	
大豆	一・五	一・六	一・七	二九・三	三三・九	三三・四	三三・一	
豌豆	一・五	一・六	一・七	三〇・五	三三・五	三三・三	三三・六	
亞麻	一・八	一・〇	一・五	二二・三	三三・九	三三・六	三〇・九	
甜菜	二・九	三・五	三・四	四四・二	四九・六	四九・〇	七二・〇	
「フツテル」	三・〇	三・八	三・二	四四・二	三三・三	三三・三	三三・六	

以上の表に依り各種の耕作物を通して其「ヘクタール」の收穫が年々増加の傾

を有するは最も注意を要す、而して耕作面積の上より云へは現時に於ては小麦、大麥及蕎麥は其價の高きに拘はらず裸麥、燕麥及馬鈴薯に比し大に劣れり「ホルランド州及ゼーラント州の二州は花園及野菜園を以て最も有名なり、此地方は人口極めて稠密にして一平方キロメートル平均三百人を超へたり、ホルランド州の花園及苗圃は歐洲中の最も名あるものに屬す、殊に「ホルランド州」の海洋的氣候は花園に最も好適なり、花園の事業は極めて小範圍の家内業にして概して十「ヘクタール」以下に止まり、之を越ゆるものは通常植物學校の經營に屬せり、此等小農事業の利益とする所は其耕作方法が非常に集約的なるにあり、一作の收穫を終れば直に之に他作を施し其間殆んど空隙を置かず、一年平均四回又は五回の收穫を見るに至れり、此小農經濟に於て和蘭の特種物産たる果實及野菜作物は其中心を置き、和蘭の野菜の輸出は特に獨乙國に對して非常の數量を示せり、要するに此等の小農が究竟大農組織のものに比し利益とする所は、主として自己の勞力のみにより他人の力を借ること少きを以て、自ら其生産費を廉價ならしむると共に其耕作が非常に親切丁寧なるを得ることにあるものとす、

大組織の果樹の栽培は「ウトレヒト州及ホルランド州」に盛なり、馬鈴薯は地味薄瘠にして乾燥せる地帯即ち「ドレンター」「オーベルイセリ」「ゲルデルン」及「ブラバント州」等に盛に耕作せられたり、亞麻の耕作地は「ホルランド州及ブラバント州」に在り、千九百七年には四千二百九十萬「キログラム」を輸出せり、濕潤なる地方にして全く洪水より保護せられざる地方に在りては亦水田を利用し、禾本科植物に依り有利に使用せらる、其他近時「アニリン」染料工業の發達に依り茜草の耕作が著しく衰況に向ひたること、及英國及佛國への輸出品として海草が「ズイデル」海の「ウイーンゲン」島附近より盛に輸出せらるゝを注意すへし動物に關しては和蘭は頗る其生産に富めり殊に和蘭の家畜業は好良の富源にして盛なる發達を見たり、即ち和蘭の濕地々方に於ては其氣候と土地の濕度とが、牧牛業に關し乾酪「バター」の製造と共に牛乳を目的とする事業の經營に最も適當せり、和蘭の牛種は頗る良好の種類に屬せり、牧羊業は其羊肉の輸出を以て大價值を有せり、此等の事業は地味貧弱なる「ドレンター州及テキセル」島に盛なり、養豚業亦盛にして「ケルトラント州」は其中心を爲せり、和蘭の濕地に於て馬の牧

養は實に其本場たり、養蜂業は「ドレンター」及「ゲルデルム州」等の乾燥せる地方に盛なり

家畜の状態及其發達

種	一八七〇年—一八〇年	一八八一年—九〇年	一八九七年	一九〇〇年—一〇年
牛	一・四三五・七〇〇	一・四八五・八〇〇	一・四八五・八五〇	一・六五五・六〇〇
羊	八九五・八〇〇	七七三・一七〇	六八・四〇〇	七七〇・七〇〇
山羊	一五〇・二〇〇	一五八・三〇〇	一六四・五〇〇	一七九・五〇〇
豚	三四六・二〇〇	四五七・五〇〇	五七一・一〇〇	七四六・六〇〇

和蘭國民の最も必要な食料は北海上に於ける漁獵に依るものにして、「ズイデル」海より英國に至るの海上は其緊要なる漁區なりとす、青魚の漁獵は英國と共に歐洲に於て最も其名を有す、千九百年に青魚の捕獲は千百九十萬「ゲルデン」に上ほれり、「セイラント州」の全部及「ベルゲン」オプ「フーム」は牡蠣の養蓄を以て名あり、千九百年には牡蠣三百二十萬「ゲルテン」を市場に出せり、其牡蠣の産額の四分の一は毎年倫動に輸出せらる、之れと同時に蟹の輸出亦非常の多額に上ほれり

礦物に關しては和蘭に於ては殆んど言ふべきものなし、「リムベルク州」に於て僅少の石炭を産するのみ、其石炭の内地産出高は千八百九十九年千九百三年に三十四萬六千六百噸、千九百四年に四十六萬七千噸にして世界産出額の〇・〇六%に過ぎず、漸く千九百六年に五十六萬四千噸、千九百七年に七十二萬三千噸に達せり、和蘭に於ては燃料品として一般の家用として又工場の汽器用として泥炭の使用盛なり、泥炭は其最も大なる産地を「ドレンター州」に見出せり、毎年の産出額は約四千五百萬噸に及へり、錫、鐵、鑛は「ゲルデルン」及「オベルイセル州」より産出す、石材は一般に甚た缺乏を告げるも粘土に富めるを以て煉瓦及瓦等種々の利用は盛に起れり

第三 和蘭國に於ける工業

農産物を原料とせる工業としては、先づ第一に砂糖製造業を擧げざるへからず、甘菜糖の外殖民地より輸入せらるゝ、甘蔗糖等か「アムステルダム」に於て盛に精製せらるゝを見たり、「北」ブラバント、「南」ホルランド、及「ゲルデルン」等の諸州は甘菜

糖の主たる耕作地なり、其千九百五年、六年の收穫は二十萬五千噸、千九百六年、七年は十六萬七千噸にして、其砂糖製造高は千九百六年、七年には十六萬七千噸にして世界の總生産の二、八%を占めり、リキユルは「アムステルダム」「ロッテルダム」「シーダム」等に於て製造中に就て「ホルラント」は最も有名なる「リキユル」の産地にして、其「ブランドワイン」の産額は世界の生産額の二%に達し、千九百五年には六十一萬、ヘクトリートルに上ほれり、麥酒は「北ブラバント」州に於て製造せり、「アムステルダム」「ロッテルダム」及「ユトレヒト」は煙草製造工場の主たる本場にして、毎年一億本以上の葉巻を製造せり、綿布及亞麻布の製造業は特に「オーベルイ」「ゼール」に於て獨乙の國境に沿ひ「アルメロー」及「ヘンゲロー」等の地方に發達せり、「北ブラバント」に於ける「チルブルグ」は良好の亞麻布を製造せり、和蘭に輸入する木綿は其半額は更に再び輸出せり、千八百九十八年には其數三千九百四十萬「キログラム」に達せり、和蘭は曾て綿布の主たる製造地と唱へられたりしか、近時は衰退して「ウェストハーレン」の近傍に於て三十萬の紡錘を有し、五十萬束を製造するのみなれば、國內の消費すら之を充たすに足らざるの狀なり、其他木綿製

造品は比較的良好的成績を收めり、即ち殖民地に送出する所の白糸布の如きは特に稱揚すべき輸出品なりとす

和蘭は曾て羅紗の第一市場として名ありしか、其後白耳義の爲めに凌駕せられ、現在は唯「ライデン」「ユトレヒト」「マーストリヒト」及「チルブルグ」等に於て稍や見るべきものの存するのみ、皮の製造は古來有名にして「アムステルダム」「ロッテルダム」及「マーストリヒト」に於て最も盛なりとす、帆布の製造は亦古來よりの特産にして「アムステルダム」及「ロッテルダム」に於て盛なるを見たり、「バタ」乾酪等の製造は既に述べたる如く頗る盛にして、「バタ」は千九百五年に二萬三千二百噸、千九百六年に二萬五千六百噸、人造「バタ」は千九百五年に五萬三千三百噸、千九百六年に五萬九千九百噸、乾酪は千九百五年に四萬五千噸、千九百六年に四萬七千四百噸を輸出せり、殊に「フリーズラント」は「バタ」の主要産地にして、「エダムチーズ」は「アルクマール」「ブルメレンド」及「エダム」に於ける最も重要な貿易品なり

和蘭に於ける鑛業は全く見るべきものなきを以て、金屬工業は和蘭本國に於ては其發達の基礎を缺く如し、雖も、其殖民地に在りては相當なる鑛産あるに依

り亦金屬工業も之に基いて其發達を見るに至れり、例へば錫の如き「バンカー」ピ
リトン島より金は蘭領「グイニヤ」より多量に輸出するを以て、金、銀、錫の製作業起
れり、此他殖民地の産出に基つく「ダイヤモンド」の磨彫及之に伴ふ工業は「アムス
テルダム」に於て盛にして「巴里」及「倫敦」に對して一大競争者と爲れり、錫の生産は
千九百四年に一萬三千噸を有し世界の總産出の二、五%を占めり、「ライン」河の粘
土よりは絶えず瓦を、又建築石材、鋪石及粘土を「ゴウデアール」及「南ホルラント」に於
て、土器及陶器を「テルフト」及「マーストリヒト」に於て産出するを見たり
器械製造及鐵工業は主として軌道、機關車、列車等の製造にして「アムステルダム」
「ロッテルダム」及「ユトレヒト」に盛なり、兵器に關するもの、製造所は唯「ハーグ」に
のみ存在せり、造船業は近時退歩せりと雖も尙ほ「アムステルダム」及「ロッテルダ
ム」に於て盛大なる造船所の存在を認めり、要之和蘭の工業は主として其原料を
殖民地より採れるもの多きと、其工業が海外貿易の目的物たること、は實に其
特徴なりと云ふべし

第四 和蘭國に於ける貿易及交通

和蘭は歐羅巴の西端に在り、三大工業國たる英國、獨逸及白國の間に介在し非常
に良好なる地位を占む、和蘭内の自然の交通路は舟楫の便ある河川及運河にし
て合計四千八百「キロメートル」の延長に達せり、其中最大なるは「ライン」河にして
獨逸及和蘭の境界に於て「ライン」河上一年に約二萬の船舶が千二百萬噸の貨物
を運搬するを見たり、此等の貨物は主として獨逸に於ける「ライン」沿岸の工業地
より出づるものなり

最多數の運河は幅員二十「メートル」深さ二「メートル」以上を有し獨り荷足船、小舟
のみならず汽船をも往復せしむることを得、殊に北和蘭の運河は最も賞讃の價
値あり是れ「アムステルダム」より「ヘルデル」に至るものなり、之に次くは同所より
「ユトレヒト」及「コウダー」等に到れる「アムステルダム」運河なりとす、南部に於ては
「ルツチヒツヒ」及「マーストリヒト」を「ヘルトーゲンボツシユ」と連絡せる運河あり、
北部に於ては先づ「グロニンゲン」運河を見出す、其最大なるは北海運河にして千
八百七十六年以來存在し「アムステルダム」を直接北海と連絡し大船を容易に通
過せしむるものなり、「ニューウエ、ウヲター、ウエグ」運河は「ロッテルダム」を北海と

連絡する重要な交通路にして「ヘーッグ、ハアン、ホルランド」に於て海に注けり
 和蘭の内地の交通は「ライン」「マース」「シエルダー」及「イスセール」等の多數の河川の
 支流、運河及地沼等に依り一大連絡系統を爲せり、其他比較的鐵道網の緻密な
 るもの存在せり、唯運河及河川の水流か發達せる地方に於ては著しく鐵道の敷
 設工事を妨害せり、其他天然石の缺乏は亦鐵道工事の一大障害を爲せり、千九百
 六年に鐵道は三千五十キロメートルに達せり、其主要の線路は皆獨逸に至るも
 のにして國際的線路として頗る主要なるもの多し、然れども和蘭は歐洲の道路
 としては「ベルギー」の便宜に如くものにあらず、即ち和蘭に於ては其英國を隔つ
 るの海路は「ベルギー」に於けるより遠く且其鐵道網も「ベルギー」の方遙かに優れ
 りとす、然りと雖も和蘭の總ての地形は其住民を海上に導き商業上の媒介を爲
 し正に海上國たるの好資格を保有するは極めて明白なり、「ベルギー」は和蘭より
 一層緻密なる鐵道網を有し一方は佛獨間の大陸的接續一方は中歐と英國との
 最短の連絡を爲し、所謂中央の「ゲルマン」人種と西歐の「ロマーネン」人種との推移
 の接衝點を爲すものなり

和蘭の鐵道は乗客數千九百二年—五年に三千六百七十萬人千九百六年に四千
 七十萬人を有し貨物噸數は千九百二年—五年に千三百四十萬噸千九百六年に
 千五百三十萬噸に上ほりたり、即ち和蘭の主たる交通線路を爲すものは「ライン」
 河と共に西獨逸の大工業地方たる「エッセン」「バルメン」「エルベル」「ヒールド」「デュ
 セルドルフ」「ケルン」「ミュンヘン」「クラーフトブッフ」及「クレーヘルト」等に於ける鐵道
 線路なりとす、郵遞事業は甚だ長足の進歩を爲し電線の延長は三萬キロメート
 ル、電話線は八萬五千キロメートルに及び、郵便は千九百一年に三億六千七百萬
 通に上ほり人口一人當七十三通に達せり、千九百六年には内國信三億七千四百
 十萬通外國信八千四十萬通合計人口一人當八十通に及へり
 商船の噸數は世界各國中第九位を占む千九百五年には四十一萬千噸、登簿千九
 百七年には四十四萬八千噸、登簿に上ほれり、千九百五年の調査に依れば人口千
 人に付船舶總噸數七十噸、登簿の比に該當せり、其中汽船噸數は六十八噸、登簿を
 占めり、其汽船歩合は即ち九七%にして之を英國に比するも遜色なく、和蘭に於
 ては汽船が主たる活動を爲すの海國たるを明白にせり、和蘭は貿易及航海國に

して船舶の交通は大に發達せり、即ち和蘭の港灣に於ける入港船舶は千九百二年には二萬二千六百六十五艘、二千五百四十萬噸、登簿千九百六年には二萬八千九百四艘、二千七百七十萬噸、登簿に達せり、三千五百艘の汽船は毎年和蘭の港灣を出帆し、其五分の三は悉く外國航路に従事するものなり。

和蘭に於ける交通及貿易は主として「ロツテルダム」及「アムステルダム」を中心として集中せり、此二市は平坦なる海岸に工事を施すに依り海上交通上甚た便利の場所と爲れるものなり、即ち「ロツテルダム」は人口三十八萬人を有し、新運河「ノイエーン、ワツスセル、ウエヒ」の開通に依り「ヘエーグ、ハン、ホルランド」を通して直接に北海と連絡し、千八百七十年又は千八百八十年の頃より北海と極めて良好の連絡を有し、滿潮期には「スエス、カナール」を通過する船舶は優に入港することを得せしめたり、之れと同時に大なる「メールポルト」に適する大棧橋を設備して河川交通上にも大利益を與へたり、此時より「ロツテルダム」は純然たる「ライーン」河の港灣として「ライーン」河地方の大部及瑞西の國境に至る迄に歐洲外の貨物を分配供給せり、殊に鑛物、五穀、石油、材木、石炭及金屬等の大貨物には最も適當せる港灣

と爲れり、故に「ロツテルダム」の現状は古の「ハムブルヒ」港を想出せしむるものなり。

「ロツテルダム」は十九世紀に於て始て和蘭第一の海港と爲れるに過ぎざるも、「アムステルダム」は人口五十六萬人を有し、古來より和蘭の門戸として大なる價値を有せり、「ズイデル」海の狭く且深き入込に於て完全に建設せられたる市街にして、古代の大船を其僅かなる水深に拘はらす善く到達せしむるを得たりしも、千六百二年東印度會社の所在地と爲り、「スパニヤ」の支配より獨立したる後、殊に「アントウエルペン」が漸く退歩の狀に向ひたるに至りては世界各國の貨物を集中して、十七世紀の中間には實に世界第一の商業地と稱せられたり、十八世紀に於ては亦退歩に向ひたるも再ひ「ウイン」會議後に於て發達の氣運勃興したりと雖も、「アムステルダム」の水運は甚た不良にして其入口には砂石多く且近時の商船は「スイデル」海に對しては餘りに過大なるを感ずるに至れり、故に市は六「メートル」の深さを有する運河を北海に對して直接に開通せんことを企て、千八百十六年—二十五年には和蘭の北端なる「ヘルデル」に向て八「キロメートル」の長さを

有する運河を開きたり、忽にして亦短距離にして効果多き連絡を北海に對して直通するの必要を認め、千八百六十五年—七十八年に北海運河の開通を見たり。是れ僅かに二十七キロメートルの長さに過ぎずして加之其深さ九、二メートルに達するを以て廣大なる米國直航船を除くの外は總ての船舶を入港せしむるを得たり。此事情は再び「阿姆斯特ダム」をして第一位の海港たらしめたり。故に「エムイデン」及「ヘルデル」は先に設けられたる運河の末にありて即ち「阿姆斯特ダム」の前市と見做さるるものなり。千八百九十二年に於て「阿姆斯特ダム」は「メルウエテ」運河に依り「ライン」河と良好の連絡を有し、殊に大貨物の運搬を計かり國內交通の重要點を占むる「ユートレヒト」も近距離の連絡を爲せり。此の如くして「阿姆斯特ダム」は元來其地位の良好ならざるに拘はらず種々の人工的設備に依り世界の最大なる「コーヒ」及粗製煙草市場と爲り、其貿易上に親密の關係を有する「ダイヤモンド」彫刻、砂糖精製、葉卷煙草製造、貴金屬材工等の工業を著しく發達せしめたり。又造船事業か和蘭に向て與へたる價値は其直接の關係を有する工業たる繩網製造及帆布製造等をも發達せしめたり。

「ロッテルダム」の大なる發達は既に「ナポレオン」第一世に依り「ライン」河關稅の廢止せられたるに始まり、其新なる運河か「ヘーク」ハンホルラント」に向て開始せられ大船か容易に北海より入港するを得せしめたるより事實上全く「阿姆斯特ダム」港を凌駕するに至れり、今其出入船舶噸數を擧ぐれば即ち左の如し

港名	千九百三年	千九百六年	千九百七年
「ロッテルダム」	九、六〇〇、〇〇〇	一一、九〇〇、〇〇〇	一三、一〇〇、〇〇〇
「阿姆斯特ダム」	二、五〇〇、〇〇〇	二、九〇〇、〇〇〇	二、九〇〇、〇〇〇
「カリッピンゲン」	一、二七〇、〇〇〇	一、一三〇、〇〇〇	一、三四〇、〇〇〇

殖民地との貿易及交通の場所としては「阿姆斯特ダム」は尙ほ主動の地位を有し、已に述べたる如く歐洲の粗製煙草の大市場たるのみならず蘭領殖民地に於ける官業の目的たる「コーヒ」の主たる貿易市場と爲れり、且「阿姆斯特ダム」は和蘭の第一の金融市場として世界に於て富める都市の中に數へらる、茲に其本店を有する銀行は概ね皆歐洲に於て大なる信用を有するの銀行たり。

「ロッテルダム」は世界の大交通點たるの資格を有し、「ロイド」ロテッルダム」及「マ

ス汽船會社所在地にして其他世界的航路に従事する船舶會社即ち和蘭、アメリカ汽船會社及和蘭と東印度、南米殖民地との連絡航海に従事する和蘭會社等の店舗亦茲にあり、其東印度のみの貿易に従事する船舶すら十一萬七千噸の多きに達せり、ライン河河口の港灣としての「ロツテルダム」は海上の航海と重要な河上の航海との變更地點と爲り、種々の大貨物殊に石炭、五穀、木材、石油、綿布、砂糖等の主なる互市場にして同時に倫動に次ぐの茶の主たる市場となれり、「ウリッシンゲン」は英國に對する最近の郵便航路及其急速なる交通地點にして其通過貿易は茲に盛大を極はむ、其位地は「マックスエツケルト」が大に稱揚したるか如く、「ロツテルダム」及「アムステルダム」より遙に幸福なり、西「シエルデー」河河口の港灣としては亦實に「アントウエルペン」の恐るべき競争港たるものなり、殊に近時「ウリッシンゲン」が鐵道に依り後方地帯との連絡の完全せるに依り一層好望なりとす、蓋し從來は「ゼーラント」は其後方地帯との連絡甚だ困難なるものあり爲めに「シエルデー」の河口地方として其土地の兩性的性質が經濟上の發達殊に貿易の發達を十分に進めさりしものあればなり

和蘭の内地貿易は其富饒なる海岸地方が其農産及水産の大過剩を高地にして牧場的且瘠地なる大陸に對して莫大の輸出を爲すに依り其特徴を示せり、其仲間貿易の第一の場所は「アルンベム」なり、沿海貿易は英國に於ける如くには到らざるも尙ほ内地貿易として比較的高度の發達を見たり、外國貿易に關しては甚だ見るべきもの多し、假令其船舶は世界第一には達せざるも世界の最も活動的の一たるは明かなり、殊に其河川に依る通過貿易は「ライン」河に依るもの實に其中心を爲し、西方獨乙が北海に對するの自然の販路を爲せり、和蘭の「ライン」河の運送に従事する船舶は千九百六年には四千六百五十八艘、千二百二十三萬噸（登簿）に上ほれり、其中汽船は四百九十一艘にして七萬五千四百馬力を有す、此の如くして過ぐる世紀に大發達を爲したる通過貿易は獨乙の「ライン」河沿岸地方に對して現に和蘭貿易上第一の位地を占めたり、「ライン」河畔は其通過貿易の爲めには最も必要なる自然的線路にして「センドゴットハルト」に於て「アルペン」の境界を踏破し恰も北海岸を地中海の海岸と正に連絡せり、和蘭は「ベルギー」の如く盛に貨物を吸収し中歐に向ふべき貨物、又は北歐の海岸

より地中海に向ふもの及其反對の貨物の集散を相互に媒介せり「ライン」河及其他の運河を除けば鐵道は西獨乙の大工業地方と好箇の接續線を爲すものたるは決して之を忘るへかざるものなり
和蘭の貿易狀況は凡そ左の如し

年次	内地用の爲めの輸入		内地生産品の輸出		通過貿易	
	千九百一年—五年	千九百六年—十年	千九百一年—五年	千九百六年—十年	千九百一年—五年	千九百六年—十年
千九百一年—五年	二、三〇〇、二〇〇、〇〇〇	二、五二三、三〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、四〇〇、〇〇〇	七、三五五、四〇〇、〇〇〇	九、三九二、〇〇〇、〇〇〇	九、五〇五、〇〇〇、〇〇〇
千九百六年—十年	二、六九二、〇〇〇、〇〇〇	二、二一〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇八四、〇〇〇、〇〇〇	二、二一〇、〇〇〇、〇〇〇	二、二一〇、〇〇〇、〇〇〇	二、二一〇、〇〇〇、〇〇〇

其輸出中の重要品は五穀花類、鐵、各種の鋼鐵及鐵器、羊毛「バタ」、人造「バタ」、乾酪、牛、羊、亞麻「リーキユール」、ブランド「酒等」にして屠獸類は毎年の輸出十萬頭以上に上ほれり、千九百六年には五萬四千頭の牛、四萬六千頭の羊、及肉五萬七千噸を輸出せり

今和蘭に於ける重要物産の輸出入を擧ぐれば左の如し

(千九百一年—千九百五年調)

品類	輸入		輸出	
	金額	比率	金額	比率
幾那皮	二七八、〇四〇、〇〇〇	一〇・一	二二〇、九二〇、〇〇〇	一〇・九
鐵及鋼鐵	二四九、一二〇、〇〇〇	一〇・九	一八六、一二〇、〇〇〇	九・九
小麥	一八二、二八〇、〇〇〇	八・〇	一五〇、三六〇、〇〇〇	八・〇
穀粉	六八、〇四〇、〇〇〇	三・〇	五八、〇八〇、〇〇〇	三・一
石炭	六四、九二〇、〇〇〇	二・八	五三、七六〇、〇〇〇	二・八
米	四四、九二〇、〇〇〇	二・八	五一、〇〇〇、〇〇〇	三・七
銅	六三、八二〇、〇〇〇	二・八	一、八八二、二〇〇、〇〇〇	一〇・〇
總輸入額	二、二八四、八〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇	一、八八二、二〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇
品類				
幾那皮			二二〇、九二〇、〇〇〇	一〇・九
鐵及鋼鐵			一八六、一二〇、〇〇〇	九・九
小麥			一五〇、三六〇、〇〇〇	八・〇
人造「バタ」			五八、〇八〇、〇〇〇	三・一
銅			五三、七六〇、〇〇〇	二・八
精製糖			五一、〇〇〇、〇〇〇	三・七
總輸出額			一、八八二、二〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇

又總輸出入の重なる分類を擧ぐれば左の如し

品別	輸入 (單位百万アルデン)		輸出 (單位百万アルデン)	
	千九百三年	千九百六年	千九百三年	千九百七年
食料	六二五、七	六五五、七	六〇三、一	五九四、八
原料	五五四、〇	六四二、七	四二五、三	四五四、四
其他品	二七七、〇	三八一、七	二六九、三	三五九、〇
其他	四二七、六	五四九、一	三二七、二	三八六、一

結論 第四節 和蘭本國國勢一斑 第四 和蘭國に於ける貿易及交通

此表を一覽するときには食料品か其輸出上上に如何なる地位を有するやは極めて明白なり、要するに輸入に於ては其再輸出するものを除きて石炭、製作物及流
行品に指を屈せざるへからず、下表に明かなるか如く和蘭の外國貿易は獨乙と
の貿易關係か最も重要な地位を占む、其輸入の五分の一以上は獨乙より來るも
のにして其輸出の半額は獨乙に向ふものなり、和蘭か獨乙に對する輸入は千八
百九十年以來除々に發達し來れるものなるか、獨乙の和蘭に向ふの輸出は絶へ
ず年々増加するの趨勢を有せり、和蘭と獨乙との貿易は總計七億「マルク」に達す
和蘭は獨乙に二億五千萬「マルク」を輸入し獨乙より四億五千萬「マルク」を輸出せ
り、和蘭より輸出するものは「バター」甘酪、肉類、新鮮野菜、花球、基鹽、青魚、葉煙草、貴金屬
金、米、馬、鶏、「コーヒ」錫等にして、獨乙より輸入するものは石炭、衣服、精洗鐵、鐵器、諸器
械類、毛織物、織物、綿製品、化學的製品及標本、色刷畫、銅版彫刻、書籍、骨牌、音樂樂器、皮
革品、金屬、木製品等なり、今和蘭の貿易を各國別とし其重なるものを擧ぐれば左
の如し

甲、内國用の爲めの輸入

國別	千九百一五年			千九百一六年			千九百一七年		
	金額	比率	金額	比率	金額	比率	金額	比率	
普魯西亞	五七、九〇〇、〇〇〇	二二・二%	五六、一〇〇、〇〇〇	二二・二%	五五、九〇〇、〇〇〇	二〇・五%			
英 國	二五、一八〇、〇〇〇	一〇・二%	三〇、八五〇、〇〇〇	一二・二%	三二、四五〇、〇〇〇	一二・六%			
蘭 領 印 度	三五、七〇〇、〇〇〇	一三・四%	三三、七二〇、〇〇〇	一三・四%	四三、六九〇、〇〇〇	一六・二%			
米 國	二五、〇〇〇、〇〇〇	一〇・五%	三一、五〇〇、〇〇〇	一二・五%	二四、四〇〇、〇〇〇	一〇・九%			
白 耳 義	二二、九〇〇、〇〇〇	一〇・五%	二六、四〇〇、〇〇〇	一〇・五%	二八、五〇〇、〇〇〇	一〇・六%			

乙、内國産品の輸出

國別	千九百一五年			千九百一六年			千九百一七年		
	金額	比率	金額	比率	金額	比率	金額	比率	
普魯西亞	九三、二七〇、〇〇〇	四八・三%	一、〇〇七、三〇〇、〇〇〇	四八・三%	一、一〇二、四〇〇、〇〇〇	五〇・三%			
英 國	四三、七三〇、〇〇〇	二二・四%	四六、五九〇、〇〇〇	二二・四%	四四、五八〇、〇〇〇	二〇・〇%			
白 耳 義	二六、〇〇〇、〇〇〇	一二・五%	二六、〇〇〇、〇〇〇	一二・五%	二八、五〇〇、〇〇〇	一二・九%			
米 國	九四、〇〇〇、〇〇〇	四・一%	八六、二〇〇、〇〇〇	四・一%	八五、六〇〇、〇〇〇	三・九%			
蘭 領 東 印 度	六六、四〇〇、〇〇〇	三・二%	六七、六〇〇、〇〇〇	三・二%	八二、二〇〇、〇〇〇	三・七%			

和蘭か獨乙に對する輸入の停止又は退歩は「マックスエツケルト」の見解に依れ

は、獨乙か其殖民地に對する發展及「ドルトムント」「エムス」間の運河の開通とに大關係を有す。若し「ライン」河か此運河に依り「ウエセール」河「ブレーメン」港を有す。及「エルベ」河「ハムブルク」港を有す。と連絡せらるゝに至らば、和蘭の獨乙に於ける輸入貿易に痛く其大打撃を受くへしと、然りと雖今日已に「ライン」河沿岸の獨乙の諸市は盛に「ロッテルダム」の仲介を排斥して、自國の船舶に依り他國の海岸と直接の連絡を企てんことを力とめたるも、尙ほ「ロッテルダム」は和蘭の海港として最も隆盛を極はめ、其内國品及海外よりの貿易品は毎年「ロッテルダム」に集中し、「アントウエルペン」と共に世界交通の門戸と云ふへき。「ドーバー」海峡に最も近き特別の長所を保有することを注意すへし、殊に之を「アントウエルペン」に比するときは其前には狭き海洋上接觸を保ち其後には獨乙の工業地方に屬する強盛なる後方地帯を藏むるを以て、大に優れるものありとす。

和蘭と其殖民地との關係に付ては東印度よりは錫、銅、粗製糖、染木、香料及米を輸入し、東印度に於ける多數の住民に對しては和蘭に生産せる工業品を供給し其貿易は主はら和蘭本國の利益を計れり、然れども其殖事地と和蘭本國との貿易

係は單に數字の上より云ふときは第四位にありて其隣國との貿易額を超越する能はず、而かも和蘭の殖民地は和蘭本國の富力の主たる根源地たるは固より明白なり。

要之和蘭は其全體に於て工業國と稱せんよりは、主として商業國及通商國と云ふを適當とす、和蘭の商船は十七世紀の中間迄は世界の最も顯著なるものなりき、當時は海上運送の大勢を支配し連戦連勝の下に「ポルトガル」人を香料諸島より追放し、僅かにして「ズンタ」島を其支配下に置き十七世紀の中間には印度洋の島及海岸には總て和蘭の國旗を掲揚するに至れり、又西印度に對しても其勢力を擴張し直に「スペイン」人より其貿易の主たる根據地を割く能はざりしも、大計畫の密輸入を行ひ「スペイン」人の貿易上の勢力を殺かんことを力とめたり、此の如くして和蘭は「ローマ」人の西南部に對して「ゲルマン」人の西北部の大勝を制し「アムステルダム」は當時世界貿易の中心と爲れり、然れども東印度會社唯一の利己的政策は、殖民地の土人に非常の重税を課し、苛重の勞働を強制したる上且之を貧困の極地に陥れたり、此の如くして其純然たる商業國は終に永く無事

太平の長夜の夢の繼續を許さずして、其軍事上の根據及國民數の上に於て確實なる基礎を缺くの結果は立ろに和蘭の海上權の喪失を來せり、而かも和蘭は唯海軍にのみ偏して陸軍の防備を怠りしか爲め其隣國の佛國の強敵に對して悲惨の戰敗に依り經濟上の大打撃を被むりたり、同時に其第一位の海上權者たるの地位は全く英國の奪ふ所と爲れり

第五 和蘭國の行政

和蘭の國體は立憲君主政體なり、其憲法は千八百四十八年十一月三日に發布せらる極めて自由主義を表彰せり、千八百八十七年十一月三十日に亦修正せられたり、立法權は皇帝と國民の代表者との協定に依り行使せらる、行政權は皇帝に專屬す、國民の代表機關は「ケネラールスターテン」にして第一院及第二院の二院より組織せらる、第一院は五十人の議員を有す、此議員は地方の各州會に於て選舉するものにして直接税の多額納税者又は重要な官職に在る者若くは在りし者の中より之を選むものとす、第二院は百人の議員を有す、此議員は二十五歳以上にして市民權及政權を有する和蘭人が選舉するものにして、被選資格として

は三十歳を超ゆることを要件とす、議員の任期は第一院に在りては九年にして第二院に在りては四年とす、皇帝の不可侵權、大臣の責任、豫算の毎年議定、人權自由、宗教自由の保證等は其憲法の重要事項なりとす、現在の皇帝は「ウイールヘルミナ」女王なりとす、女王の費用は一部は帝室財産の收益、一部は皇室費より支辨す、政府は「ハーグ」に在り

内閣は外務、司法、内務、海軍、大藏、陸軍、殖民、治水（ウヲタースタート）及農商務の九省より成る、地方は十一州に分たる、各州には皇帝の代表者一人を置く、曾ては知事と稱せられたりき、各州は州會に依り代表せらる、州會議員は六年の任期とす、市長、陪席者及七人以上四十五人の議員を以て組織す、市長は皇帝より選任せらる、其任期は六年とす、陪席者は議員中より六年の任期を以て選舉す、議員は住民中より選舉せらる、特別の官廳は治水省にして堤防、池沼、河川、運河等の治水事務を管理す、是れ和蘭の國情に依る特別の行政機關なり、最高の裁判所は「ハーグ」に在り「ホーグヘラート」高等法院と云ふ、其下に五箇の地方裁判所あり「アムステルダム」「アルンハイム」「ハーグ」「ヘルツォグーンブユシユ」及「レーワルド」等に設置せら

る、其下に二十三の區裁判所あり其下に百六の單獨判事配置せらる、會計検査院は「ハーグ」に在り政府の歳入歳出を監督する獨立官廳にして皇帝に直屬す、千九百六年の豫算に依れば歳入は一億七千二十五萬二千二百九十五、クルデン、歳出一億八千八百八十六萬七千五百三十九、クルデンを算ふ、其歳入中の主なるものは直税として地租、對人税、財産税、營業税等三千八百八十一萬九千、クルデン、あり間接國税五千四百八萬、クルデン、印紙税、相續税、登記税等二千四百十四萬、千五百、クルデン、あり、歳出は帝室費九十九萬、クルデン、國債利子三千六百六十九萬、九千、四百二十二、クルデン、陸軍二千七百七十八萬、九千、四百四、クルデン、海軍千七百二十六萬、七千、二百二十八、クルデン、農商務三千七百八十八萬、三千、二百九十四、クルデン、天藏二千三百八十八萬、四千、四十六、クルデン、内務二千五百七十五萬、三千、五百四十五、クルデン、等を主なるものとす、地方行政費は七百萬、クルデンに上ほるも概ね各州の負擔とす、國債は特別の沿革を有し千七百九十五年の佛國戰爭の爲めに七億八千七百萬、クルデンの債務を起し、千八百三年の終までには其公債額は十一億二千六百萬、クルデンに上ほれり、和蘭か一時佛國に併合さるゝに當り九千萬、グ

ルデンを更に増額したる公債は「ナポレオン」より其三分の一を減債せられ、其結果千八百十四年に佛國より獨立したるときは其公債額は五億七千五百萬、クルデンとなれり、然れども「ウイヘルム」二世の時に其公債額は殆ど復舊せしか、終に白耳義か和蘭より獨立して千八百三十九年四月十九日の條約を以て和蘭に對して五百萬、クルデンの年賦金を負擔したるに依り著しく其公債額を減し、且千八百五十年より大に公債の償還を行へり、千八百四十六年の始には公債額十二億三千百十二萬、クルデンにして、千八百六十四年には十億、千五百二十九萬、クルデン、千八百七十六年には九億二千四百三十萬、クルデンと爲りしも、千九百六年に再ひ十一億四千四百萬、クルデンに上ほれり、其公債の償還高は千八百五十年以來一億七百萬、クルデンに上ほれり

第六 和蘭國の軍備

千九百一年發布の軍事法規に依れば陸軍は常備、後備及國民軍より成立す、兵役の義務は二十歳を以て始まり常備の服役年限は八年とす、其中志願兵は十二月、普通兵は八月半より十二月迄、騎兵は八月を現役とし其餘を豫備役とす、豫備

役經過の後は後備兵役に就くものとす、其服役期間は七年にして毎年二回六日間の演習あるのみ、後備役終了せば國民軍に編入せらる、國民軍は年齢五十歳に達すると共に其兵籍を除かる、陸軍大臣、參謀部長、及歩騎砲兵の監督將校並軍醫監を以て其陸軍の主腦部とす、其兵力を舉ぐれば歩兵は三師團にして十二聯隊四十八の歩兵工兵輜重兵大隊より成る、騎兵は四聯隊にして其中に驃騎兵四聯隊、傳令騎兵一中隊を有す、野戰砲兵は四聯隊にして乗車砲兵三中隊、騎砲兵二中隊を有す、要塞砲兵は四聯隊あり、工兵は一聯隊あり、其中鐵道隊は二中隊、電信隊は二中隊を有す、千九百五年に於ける平時總人員は士官千七百九十四人、兵士一萬四千八百八十四人、大砲百五十六門、馬五千六百二十一頭を有す

蘭領東印度の兵備は本國より獨立の編制にして、其兵力の主要を舉げは二十の野戰歩工、輜重兵大隊、其中二十七中隊は歐人、十五中隊は「アムボン」人、三十八中隊は「ジャワ」人なり、十の守備大隊「アチエ」には五憲兵分遣隊を有す、其他騎兵一聯隊、野戰砲兵七中隊、山砲兵二中隊、要塞砲兵七中隊、守備砲兵五中隊、工兵八中隊を有す、總計其平時定員は士官千三百七十人、兵士四萬人にして其中一萬六千人は

歐人なりとす

和蘭の曾て強盛を誇りたる艦隊は、十七世紀以來和蘭の政治上の勢力及貿易の衰退と共に漸く頽境に陥りたり、千七百八十年の英國戰爭に於ては其艦隊は全く勢力を失したるも、千七百九十年には尙ほ四十四の戰艦、四十三の「フレガット」艦、百の小船を有せり、千八百四十六年に汽船の輸入せられたるより四戰艦、十四「フレガット」型戰艦、九古代海防船、十五の二本檣帆船、十の汽船、九十五の單檣帆船等總計百九十六艘を有したり、千八百六十年には汽船數四十二に増加せり、近時軍艦の構造進歩し甲鐵艦及甲鐵の「デッキ」を有する軍艦の製造せらるゝに至りてより稍や發達して、千九百六年には七甲鐵艦、噸數二萬八千、八の裝甲巡洋艦、噸數三萬三百、一無裝甲巡洋艦、十三砲艦、十五の大なる二十の小なる水雷艇、十四舊式裝甲艦及二十舊式砲艦等、専ら印度洋の防備に従事するを見たり

第五節 最近世に於ける歐洲強國の殖民的態度

最近世に於ける歐洲強國の殖民的態度は如何之に關しては一九一三年發行「グ

スターフ、ローロッフ氏歐洲殖民史第二二七頁以下に明かなり、故に主として之に依り左に其要領を擧げん

露國は亞弗利加に於て歐洲各國が其殖民上の大争闘を行へるの間に、其勢力を専ら遠東なる東方及北方亞細亞に向て集中せり、東部シベリヤ地方は元來露國が太平洋に其門戸を求むべき好處なりと雖も、其東北に偏在せるか爲め過去殆んど二百年間は全く其注視を怠れり、是れ一は土耳其及西部亞細亞方面に於ける露國の南下に關して最も緊要の問題の横たはるものありしに因るものなり、十九世紀の中間より漸く露國の態度に關して一新變化を見るに至れり、即ち「クリミア」戦争の結果露國の土耳其方面に於ける南下を一時全く制止したるや、露國は此に於て其全力を遠東の「シベリヤ」方面に注かんとせり、當時支那政府が英佛兩國の爲めに壓迫せられ難境に陥れるを利用して、露國は容易に黒龍江の下流地方及朝鮮の北境に到るの廣大なる日本海沿岸地方を支那より割讓を強制せり（一八六〇年）次て當時大石炭鑛の存在を傳へたる樺太島を日本と分割せり、一八七五年此等廣大なる東方地域を其歐洲の領土と緊密に連結するの必

要は、大藏大臣「ウイッテ」をして遂に「シベリヤ」鐵道敷設の大事業を成さしめたり（一八九一—一九〇〇年）同時に浦潮港か冬季は氷結して船舶の交通を絶つを以て新に黃海方面に不凍港の獲得を求めたり、露國の慧眼は先づ遼東半島の一要害旅順の上に注かれ、同時に滿州の大廣野を東部シベリヤ地方及遼東半島間の接續地境として露國の保護權の下に置かんことを計畫せり、永き時間露國皇帝は幸運より支配せられ著々其目的を遂行せり、日本及支那か一度朝鮮半島に於ける優先權を争ひ其間に戰闘を突發し、日本か支那に對して大勝を制して其結果馬關條約に依り遼東半島を取得するに至るや、露國は勿皇として獨逸及佛國を促かし合同して故障を提出し、遂に日本をして遼東半島を放棄せしめたり（一八九五年）其後滿州の經濟上の開發、遼東半島に於ける旅順の占領、旅順より滿州を通過して「シベリヤ」線に到るの鐵道支線の敷設等の露國の經營は、日に月に著しく其歩を進め偶々支那に於ける義和團の亂は、支那の上に歐洲各國の大干渉を招くに到るや、露國は此機會を利用して公然滿州を占領せり、滿州は此の時より名義上尙ほ支那の主權の下に止まれりと雖、事實は全く露國の一地方に屬する

に至れり(一九〇一年)此大併合に對して何等の異議抵抗の起るを聞かさりき、英國及日本は固より露國の北支那に於ける保護權の獲得に關しては大なる反抗者なりと雖も、當時露國の軍隊を旅順及奉天より放逐するの實力を欠きたりき、他の歐洲の強國として佛國は當時英國の敵にして其同盟國たる露國の前進を満足視せり、又獨逸國は當時露國との關係頗る親善にして亦其支那に對するの野心は却て之を利用せんとし、大に露國の態度を歓迎せり東亞に於て軍事上及商業上の支柱點の占領は、伯林政府の永く渴望するところにして偶ま獨逸人宣教師の殺戮事件の突發は(一八九七年)獨逸に一個の口實を支へしめ、九十九年租借の形式の下に獨逸は山東省の一沿岸に膠州灣を獲得し、茲に模範的なる築港及交通計畫を確立し將來の一大重要な門戸を北支那の一方面に開放するに至れり、獨逸は同時に南洋方面に於て「カロリネン」群島を「スバニヤ」より買取り「サモア」群島を英國及米國との間に分割せり(一八九九年)

此獨逸の山東省に於ける小獲得は、支那の獨立に關し亦外國の利益に關しても格別の影響なきを以て殆んど全く列國の問題を惹起することなかりき之に反

して露國の滿州に於ける大獲得は漸く各國の注視を惹くに至れり、而かも露國は尙ほ滿州の取得に甘んぜず勢の利なるに乗して其手を更に朝鮮半島上に擴張して、其鑛業上及森林上の利權を占握するの外に新に太平洋上に於ける一港を朝鮮半島上に取得せんせり、是れ日本か朝鮮に於て其自然の殖民地を取得し且茲に其國防の外衛を置かんとするの態度に、大打撃を與ふるものにして日本は遂に干戈を採るの止むを得ざるに至れり、其結果は露國の大敗を來たし(一九〇五年)露國は日本に對して朝鮮半島の全部を放棄するのみならず遼東半島を讓渡し南滿州も亦日本に放置するを強制せられたり、是れ露國の侵畧の大蹇跌なり、然れども露國は尙ほ浦潮港を保有し北滿州を事實上支配せるを以て亦東亞の一大強國たるを失はず、故に其日本との敵對は固より全く除去せられたるにあらず唯緩和せられたるのみ、日本は其戰勝の結果を全ふするか爲め終に朝鮮を併合して確實に其成效を收めたり(一九一〇年)

此等の東方に於ける紛糾と其國內に於ける内亂とは、漸く露國の頽勢を促かし其反影として露國の強敵たる英國に向ひ自ら特別の大利益をもたらせり、即ち

露國の勢力の箝制は英國が年來の宿望たる印度地方と支那の揚子江流域とを
 接續するの樞要地域たる西藏を英國の掌中に收むるの計畫を安して著手する
 を得たり(一九〇四年)然れども英國は亞細亞に於けるより亞弗利加に於て一層
 の活躍を試みたり、即ち「ハシヨダ」事件が佛國の弱點と露國の亞弗利加に於ける
 冷淡とを暴露するや、英國は猛然として「ブユレン」國に對して高壓手段を用ひ速
 に南亞弗利加の占領を確實ならしむるを決意せり、「ブユレン」國の併合は「ブユレ
 ン」國か金及「ダイヤモンド」に富めること、和蘭人の優秀なる國家的團結の成立を
 恐るると、英人の「トランスワール」に於ける自然的發展の困難なること及び「チャ
 ムバーレン」の主唱せる殖民地大合同論等か其原因を爲たるものなり、當時英國
 は「トランスワール」に對して主張し得へき政事上の堂々たる口實は全く之を有
 せざりしに拘はらず、「ブユレン」國政府の外交の拙愚は容易に英國政府をして
 宣戰を決定せしめ三箇年の戰役を以て其二共和國は全く英國の屬領と爲れり、
 (一九〇二年)英國政府は五年の後には此殖民地に古有の議會と政府とを有する
 の自治を與へたり、南亞の併合は實に英國の勢力の強盛を誇るに足るものにし

て英國は歐洲の輿論に大反對して此干戈を起したるも曾て外國の干渉を起さ
 ざりき、此の如くして英國は一面に於て其同盟國たる日本をして其強敵、露國の
 遠東に於ける大發展を抗制せしむると共に、自らは優々南「アフリカ」及西藏に於
 て他の企つる能はざるの大獲得を收め、他面には其殖民上の最古の敵者たる佛
 國に對しては近時頗る良好親密なる國際關係を保持するに至れり、英國の外交
 手腕の巧妙は實に各國をして一大括目を要せしむるものありと謂ふべきなり、
 佛國は「ハシヨダ」事件以來露國に於ては英國に對抗すへき信頼の援助を有せさ
 るを喻り、若し英國か「シイラム」及西部「アフリカ」に於て新なる殖民上の爭議を提
 起するときは固より佛國の一頓挫を招くの虞なきにしもあらざるの事情ある
 を認めたり、之を以て急に「其強隣たる英國に對して稍や繼續的の妥協を試むこ
 とを強要せられたり、歐洲の一般なる政治的觀察を以てせば、佛國は英國の援護
 の下に獨逸に對して早晩一大復仇戰を試むに至らんこと明かにして、露國は之
 に關して決して干渉を試まざるものなるを認むるもの如し、英國は獨逸が日
 に月に其強大を加へつゝあるの海軍上及經濟上の發展に對して、著しく敵愾及

疾視の度を強めつゝあるは極めて明かなり、此の如くして英國及佛國の間に於ては自ら其必要に迫られ相互の近接を來たし、茲に一協約を成立せしめ其兩國間の争ある問題を一切平和解決するを見るに至れり(一九〇四年四月八日)、此協約に於ては佛國は埃及に於ける英國の地位を明白に確認し、スエス^{スエズ}の地峽及紅海に於て從來の希望たりし共同支配權を全く放棄するに至れり、而して「セネガムビエン」「シーゲル」地方及「シヤム」に於ては英國は佛國に對して其數多の争議を全然放擲し、「マダガスカル」に於ては佛國が關稅政策上の完全なる自由行動を容認せり、此協約中の最も重要な部分は「マロツコ」問題にして、英國が三十年不變更に止まりし商業上の權利を捨て、全く佛國の保護權を確認せり、是れ佛國の重大なる成効と謂ふべく英國は此大讓歩を全く無報酬の下に行ひたり、蓋し佛國は已に埃及問題に於て英國の權利を確認するものあればなり

「マロツコ」に關しては佛國は「スルタン」に對して其軍隊及警察を佛國士官の指揮の下に置き、佛國の資本及貿易の特權を主張し、要之に「マロツコ」をして新聞紙に公言せらるゝ如く「トニス」と同一の地位に置かしむることを求むるものなりき、

人は之に依り佛國の理想たる大なる北「アフリカ」共和國の一部が發現せるものなりと稱せり、佛國の「マロツコ」取得に關しては二強國即ち獨逸及西班牙は最も利害關係を有せり、「スパニヤ」は「マロツコ」の隣國にして其間に活潑なる交通を有し已に永く其地方の取得に關して盡力せり、「マロツコ」に於ける獨逸の貿易は未だ僅かに數百萬「マルク」に止まれるも「マロツコ」に於ける獨逸資本の投下は漸く増加し、其榮譽より云ふも又經濟上の利害より云ふも此自由開放の天地をして再ひ不法に閉鎖せしむることは決して見逃すを許す能はさりき、「スパニア」に對して佛國は特別條約を以て一二の讓歩に依り其解決を見たりと雖、獨逸國は斷然佛國の此不當なる要求を否認して其結果として「マロツコ」問題は數年間獨佛間の外交上の一大争點と爲り、其間に屢宣戰を見んとするか如く事情の切迫を告げたり、此場合に於て獨逸は常に英國が其公然たるの敵對者なるを打算せり、七年間の紛擾の後最近の獨佛條約に依り漸く其平和なる解決を見たり(一九〇一年十一月四日)、獨逸は此條約を以て「マロツコ」に關する佛國の保護權に對する異議を撤回せりと雖、佛國は之に對して中央亞弗利加の一部殆んど獨逸國の一

半大の土地の讓歩を以てし、獨逸は之に依り「カメルン」より「コンゴ」地方への門戸を見出せり、其他佛國は「マロツコ」に於ける獨逸の經濟上の權利を保證し、領事裁判權、獨逸郵便、貿易の均一待遇、獨逸資本の公共事業に對する干與等を認容せり

「マロツコ」問題は獨逸に對しては英國に於けるより重大の關係を有せり、何となれば英國が露國との間の殖民地問題に關して允協を爲し對獨的三國同盟を成立せしむるの原因を爲せはなり、露國は日本に對して大敗北を取りたる以來近時は新なる攻撃態度を自制し、「アフガニスタン」に付ては其英國の勢力範圍たることを是認し、從來英露間の爭議の目的物なりし「ベルシャ」に付ては之を英露兩國の勢力範圍に分割し、終に西藏に付ても從來の競争を中止し之を兩國にのみ開放すへきを約定せり、此の如くして近時は獨逸國は亦露國に對しても其後援を失ふに至れり、伊國は「トリポリ」問題よりして英國及佛國の反對の位地に立ち一時獨逸と同盟するに至りしも、近時は再び亦英國及佛國に近接せんとせり、彼の三國同盟が殖民地問題の爲めに成立したるか如く、今や亦殖民地問題の爲

めに此同盟は將に破れんとせり、近時世人は頻に英佛露の三強國が合同提携して世界地圖を獨逸の負擔を以て大變更せんとするの計畫のあるを盛に喧傳せり、即ち英國は「アラビヤ」「シリヤ」「南」「ベルシャ」及「南」「メソポタミア」の上に其保護權を確立して之に依り埃及と印度との連絡を完全にし、此地方をして獨逸の勢力及獨逸の貿易に對して全く閉鎖せんことを力めたり、「バグダット」鐵道は獨逸の資本が「アジャトルコ」の上に大勢力を占むるの基礎を爲すものたるを以て、英國は其上に勢力を占めんことを力めたり、露國は「スルタン」より其歐亞の領土を能ふ限り買取らんことを銳意盡力せり（一九〇八年）、然れども凡ての此等英露の計畫は亦獨逸及奧國の毅然たる態度と土耳其の革命とに依り常に防止せられたり

要之英國は埃及より起り「アラビヤ」「シリヤ」「メソポタミア」「ベルシャ」及「アフガニスタン」を其獨占的勢力範圍とし、印度との連絡を堅固にし、更に印度の北部より起り西藏を其掌中に收め、直に支那に於ける揚子江流域と印度との完全なる連絡を計かり、之を以て埃及より印度を経て揚子江流域に到る一帶の長陣を嚴守

し、茲に南西亞細亞席卷の大經營を立て、佛國及露國との間に三國同盟を締結し、伊國をも更に其圈内に加へんとせり、獨逸は之に對して奥國及土耳其古と提携して南下して直に「ベルシヤ」を其掌中に收め、英國の南西亞細亞席卷の大計畫を中央より蹶斷し、左しては印度右しては埃及を脅かし一舉して英國の肝膽を寒からしめんとせり、其狀は正に龍虎相搏たんとするか如きものあり、實に天下の壯觀たり、兩者は今後如何なる謀計を以て之を守り、如何なる策略を以て之を攻むるか、吾人は徐に其形勢の變轉を注視熟察するを要するものあるなり

殖民は各國勢力發展の根基たると共に、亦各國勢力發展の成果にして兩者は相互に因果の關係を有せり、尺寸の地と雖殖民地の擴張は之を熱望せざるへからず、一步の地と雖殖民地の喪失は之を嚴守せざるへからずとするは、方今立國の大方是なりとす、蓋し殖民地を有する場合に於ては其本國に失ふところは殖民地に依り之を補ふことを得、甲殖民地に破るるものは之を乙殖民地に於て成らしむることを得、實に殖民地は其本國の爲めに勢運を保持擴張するの基礎を爲すものなればなり、夫の英國が世界に其優盛を誇るものは全く其殖民地の大を

爲すものあるに依る、英國が其殖民地を全く失ふの日は固より其没落の日なりと謂はざるへからず、英國の殖民地を有するの強盛なる今日に於ては、世人は全く英國の不滅を稱するに至れり、即ち英國の帝國主義の崇拜者は「プロイセン年報一二七卷七八頁參照」英國が殖民地を有するの間は、たとひ將來の「ナポレオン」が英京倫敦を奪ふの日又將來の「アレキサンデル」が印度を征服するの時到れるとするも、尙ほ英國は他の殖民地の存續する限は滅亡せずと云へり、亦理由なしとせざるなり、國家の興隆を希ひ國家の永久存在を欲する者は、須らく其殖民地の大を圖らざるへからず、此に於て尺寸の土地と雖とも輕しく之を放棄するは愚も亦甚しきものと云はざるを得ざるなり

第六節 餘論

吾人は蘭領東印度を視察して終に、吾帝國臣民は此方面は於て如何なる活動を爲しつゝあるやに想ひ到れり、吾人は偶ま其現狀を目撃し實に奮慨悲憤に堪へず、大に帝國の士人か今後に於て蹶起奮躍して其立脚點を確立せんことを渴望

して止まざるなり、當地方に於ける帝國臣民の勢力は却て往時に於て寧ろ見るべきものあり、其數世紀前に於ける帝國臣民の痕跡は今人をして幾度か肉躍血湧かしむるの感を催ふさしむるものなきにしもあらず、瓜哇^{バタウィヤ}駐在浮田日本領事か最近時に於て日本人の舊墓碑殆んど三百年前のものを發見して、其傳來を明にせるの記録は亦帝國臣民か古代に於ける活動の一斑を窺はしむるに足るものあり、故に左に其一節を摘録せん

『南洋の人種風俗は日本人の其れに似て居る點が澤山ある、日本人の血管中には確に南洋人の血を混へて居る、併し南洋人か日本に移入したるものとすは開は太古のことであらう、彼等移動の事跡に付ては學者間未だ十分研究か届いて居らぬ様である、去りなから西曆十六、七世紀の頃日本人か今の蘭領印度方面に多數流込んだことは事實である、彼の香料を以て有名なる「バンダー」島の「オランジュナツリ」城は千六百十七年に日本人の手に成りたりと傳へられて居る、又「アンボイナ」に於ける英人虐殺事件の導火線は日本人であつたのである、當時英蘭兩國人共、香料貿易の獨占を企てた頃なので、兩者の間柄は犬猿も只ならぬ關

係であつたのだ、折も折千六百二十三年二月十二日日本人「クリッウイス、ミヒン」なるもの誤て「アンボイナ」の和蘭城砦内に踏込んだのである、そこで大騒動か始まつた、當時同地に居た他の十二名の日本人は悉く逮捕せられ、聞くも恐ろしき拷問を受けたのである、和蘭人は豫て心中一物ある所から之は必竟英國人の仕業に違ひない、英人の探偵であると云ふ所から夫を口實に在留英人を悉皆捕縛し、同年三月九日日本人諸共一同慘殺の憂目を見た、足利氏の季世に方り吾西南豪岩不羈の士は國內に鬱勃たるを欲せず、海賊と變して朝鮮支那沿岸は勿論今の所謂南洋方面をも劫掠したらしひ、倭冠衰へ織田、豊臣氏の頃呂宋貿易か盛大と爲つた、泉州堺は其貿易港で、呂宋助左衛門等の豪商も居たのである、千六百年頃呂宋には已に一千内外の日本人か居て随分亂暴を働いて居たものらしひ、其後徳川氏の世と爲り朱印船代で海外貿易に従事したことは誰れも知て居る所である、歴史上確たる證據こそなければ此等の大膽不敵なる海賊はら、又は落武者連或は冒險商人乃至耶蘇教徒等にて、今の蘭領諸島に漂流若くは渡航したるものは少くあるまい、漂着したるものも數多あると思ふ、證據には彼の明和元年奥州

より船出したる船頭が常陸沖にて難破し、百一日目に「ボルネオ」に着し、其後九年目に日本に歸たことか南洋奇聞なぞに見へて居る。又近年海流調査の爲め臺灣又は香港近海にて投入した標識瓶が「チモール」島又は「マカツサー」の沖にて拾上たることかある。此等に徴するに邦人中蘭領に漂着したるものかありしことは無論想像か出来る。「セレベス」島の東北端に「ミナハツサー」と云ふ地方がある。此地方の人民は面體風俗殊に日本人に似て居る。又名詞中日本語と同じものか随分ある。土人も亦日本人の後えいてあることを認めて居る。此等のことから考ふるに三四百年前の頃日本人が該地方に移住したることは殆んど疑を容れぬのである。按するに和蘭人か始て日本に來たのは慶長五年(千六百年)である。同年「リーフデ」號船長「カピタン」ヤコブクリレルナツクは「マゼラン」海峡を経て東洋回航中豊後に漂着した。蘭人耶楊子か英人安針と瓜哇より泉州堺浦に來たのも亦同年である。其後蘭船は葡西諸國と共に平戸で貿易を營みて居たのである。寛永十七八年の交平戸に残りし蘭人商館は悉く長崎出島に移さる。外國貿易は蘭人に限り許されたのである。當時和蘭商船の根據地は「バタビヤ」である。「バタビヤ」は舊「ジ

ヤガタラ」と云ふ所で「ジャガタラ」芋の名稱の起りも亦此地名に因んだのである。切支丹に對する徳川幕府の取締は漸く嚴重と爲り、寛永十四年島原の亂起り續て鎖國令か出て外國との交通は六かしくなつた。長崎及平戸に居た耶蘇教信者山崎甚左衛門宗名、エヌテル、濱田助右衛門、妻峰十兵衛、姪春判田五右衛門、娘「マルネリヤ」なぞか咬嚼吧即ち「バタビヤ」に放逐されたのは寛永十六年の出來事である。「ジャカタラ」は此の仲間のものか送たものである。此の前後まで咬嚼吧萬丹に朱印船か寄港したることも確である。當時の日蘭貿易は畢竟長崎「バタビヤ」貿易である。朱印船乗組員、蘭船乗組の我海員、或は備兵、又は前記追放人等夥しく「バタウイヤ」に上陸したるに違ひない。故に當地に來てから約二年間日蘭貿易交通史上何か面白き遺物はないかと兼て心掛けて居たか、頼と手懸かない。遂に此頃京都文科の原博士と同道圖書館なぞを見たか何の獲物もなかつたのである。近頃聞くところにては大隈伯を會長に戴く日蘭協會では、南洋「スマラン」博覽會の請求に應じて、日蘭交通に因たる物品を出品し、同時に日本と和蘭と題する和歐兩體文の一大冊子を編纂することだ。此舉たるや已往三百年間に

於ける日蘭舊交を温むる上に結構である。[バタビヤ]側には何も無いのは甚だ遺憾である。考へて居た、矢先不圖したことから當地[パラパツタン]の英國寺院構内に古き日本人の墓石があることを聞き、早速見たか吾人祖先の墓石に間違かなかつた、高三十七吋九幅三十三吋五、厚四吋四、表面中央に留愛碑の三字か太く刻まる、其兩側に一行二十二三字詰十行計の碑文か漢文で記されてある又碑の裏面には蘭語と[ラテン]語にて左の如く刻まれて居る

安 永

Here rests the Honorable Michael T. Sobe Christian Japaner born at Nagasaki on

15. August 1605 a. v. Died the 19 th Aprie 1663 a. v.

年代から考へても正しく被追放者の一人である。該墓石は元ハタビヤ下街カリブツサン附近の路傍敷石と爲て居たものを、約二三十年前日本から漫遊に來た英國宣教師某か發見し、其人馬にふみ付らるゝを痛み英國寺院内に運んだものである。去れば吾人の祖先か今の[カリブツサン]附近に生活したるもの、墳墓たる事も想像せらるゝ云々(大正三年七月浮田領事報告の一節)

以上の一節は正に帝國臣民の舊時に於ける意氣を偲はしむるものあり、當時は帆船に依り風浪を凌ぎ半年又は一年を費やし、殆んど懸命的に渡航するものにして現時の如く汽船に依り悠々安臥數週日中に渡來するものとは、其難易日と同ふして語るへからざるものあるなり、實に當時に於ける帝國臣民の元氣の活躍せるは、懦夫をして起たしむるの概あるなり、然るに現時の帝國臣民の状態は如何、現に帝國臣民の蘭領印度に在るものは其總數を擧ぐるも千人を出ること多からざるもの、如し吾人か旅行上に於て最も重要な大市街に於てすら尙ほ且つ百人の日本人の集團を見出すこと能はざりき、而かも其住民の内容の貧弱なるに至りては實に言ふに忍ひざるものあり、即ち[バタウイヤ]には日本領事館の外殆んど日本人の存在を言ふべきものなし、[スラバヤ]には三井の小出張所あるも單に砂糖の市價の傳達機關たるに止まり微々として言ふべきものなし、其他の在留人數十人あるも大に將來の望を屬するものは唯數人に過ぎず、[スマラン]には五六の賣業者の成功者あるのみ、[セレベス]島には[マツカサー]に高瀬貝の買収に従事する商人の一二の聞ゆるものあるのみ、[ミナハツサー]には僅

かに山田某か農事經營及雜貨に従事しつゝあるのみ、ボルネオ島に於ては「サマリンダー」に於ては小川某か石油會社の一技師として稍や成功の名を成すものあるのみ其他は「アロー」島に於て眞珠貝の採收に従事する潜水漁者の邦人一團を聞くのみ邦人の現狀は實に全く零と云ふも可なり、之を支那人か六十萬人以上の多數を有し事實に於て内地の商權を占握し、歐米人か堂々として政治上及經濟上の實權を獨占し、蘭領の天地に雄飛し其隆盛を傲るものに比すれば、吾人は實に之を比喻するの辭無く唯啞然たらざるを得ざるなり

抑も南洋に關しては我邦に於て現に二大謬説を有するか如し、一は南洋積極論者にして之れ新聞雜誌及當世流行の南洋諸冊子の上に散見する議論なり、南洋には金銀寶石到る所に山積し天與の富源手に唾して直に採ることを得べく、何れの人を問はず卒先して南洋に盲進せよと云ふものなり、是れ全く其真相を誤まれるの甚た大なるものなり、南洋固より天恵に富むと雖も金銀寶石漫に之を求むへからず、假令弱國なりと雖も排日の氣勢盛なる和蘭政府は其上に儼然として存在せり、土地其他の富源には自ら一定の所有者あり、之を得るには所

定の制規に従ひ適當の資本と勞力と幾多の歲月とを必要とするは固よりなり、漫に田野に草花を摘むか如き容易の業にあらざるは明かなり、世人か南洋を紹介して其筆力の自ら誇大に失するものは恕すへきに似たりと雖も、往々青年無經驗の徒を誤まり漫に書冊の記事を過信して無準備に彼の天地に勇往を試み非常の困疲を極めしむるもの少しとせず、吾人は現に一青年に邂逅し其悲惨なる實歴談を聞き、實に同情の涙を注ぎ大に其將來に警戒を加へたることあり、固より此等は主として其青年者の過失なりと雖も、所謂小新聞小雜誌の無責任なる言論の弊害の恐るべきに驚けり、現に其青年は一書冊の記事に依り南洋の賣藥行商の多利を聞き、百方工夫して旅費を調ひ、彼地に勇往し「スマラン」の一藥店に就て一行商たらんことを求めたり、藥店主は青年の行爲を危みしも其志を壯とし貸すに三十圓の賣藥を以てし、其行商に依る利益の大分は之を青年に與ふることを約せり、蘭領東印度は元來赤道直下の地、或は自働車に依り或は汽車、汽船に依り又は馬車に依りて旅行せば、固より格別の困難なく南洋の好風景を吟賞するの太平樂を演ずるを得へきも、終日赤脚を以て旅行すこせは南洋の苦熱は實に

言語に絶するものあり、加之賣藥行商の利益は全く過去の一夢に屬し、從前の亂暴なる行商者輩か漫に藥にもあらざる砂粉を以て土人を欺瞞し暴利を貪りたるの妄動輕舉は全く土人をして賣藥行商人の信用を失はしめ今は終日行商して顧客を求むるも殆んど買手を見出さざりき、青年は奔走一日身體恰かも綿の如く疲れ、夜に入り僅かに寢に就かんとするも亦之を得へき宿泊料なし、此に於て一土人に就き強て求て漸く原價の半額を以て二、三の藥品を販賣して一泊一食の資を得たり、然れども其食事は土人の最劣等のもの固より普通人の食ふべきものにあらす、其室は土人の不潔を極はめたるもの固より宿泊し得べきものにあらざるや明かなりと雖も、終日勞苦の困憊は青年をして總ての意識を失はしめ茲に辛ふして宿食するに至れり、翌日の旅行亦此の如し此くして青年は言ふへからざるの艱難を嘗め未見の地に苦熱と闘ふて、再ひ其「スマラン」に歸來するの日は齋らす所如何、其携ふ所の賣藥は全く其往返の旅費の資と爲り手に亦一錢をも殘存するものなかりき、店主か幾干の利純あるやの間に對しては寸毫の利を見ざるのみならず、其元本すら全く失ふを、以て答へざるへからず、店主は

此に於て其賣藥賣上の利純は全く放棄するも、其原價三十圓は青年の借金と爲すの止むを得ざるを言へり、店主の言固より理を悉せり、青年は之に服するの當然なるのみ、此の如くして遂に青年贏ち得たるものは數週の辛苦艱難と新に負債三十金を増したるのみ、爾來半年其始に比すれば幾分か有利なるも究竟借金を倍加するのみにして前途何等の光明を認めず、今や歸來せんとするも旅費なく徒らに南洋の天地に無限の苦痛を忍んで懸命の奮闘を試むのみ、店主は全く純然たる商人にして冷刻言に絶へたりと、此青年は所謂薄志弱行の徒にして甚た意氣地なきの限にして其罪主として青年に在るは勿論なりと雖、世間亦之に類するの例頗る多し、經世家は之を以て徒に青年の罪として看過することを得ざるなり、是れ所謂世上の南洋積極論者を妄なりとする所以なり、又一説は南洋消極論者なり、此説は蘭領東印度在留の有力なる會社及商店の月給取店員にして奮闘の元氣なく徒に俸給に衣食する者輩に依り唱道せらるゝものなり、其言ふ所は南洋に於ては日本は立後れなり、歐米人及支那人は皆數百年前より着手し其基礎堅確にして全く商權は其掌に占握せらる、今や日本は到底進むの餘地

なしと豈夫れ然らんや、例へば支那人に付て謂はんか現在の支那人の盛況は何人も疑を容れず、中には往々歐米人を凌かんとするものありと雖歴史を按ずるに支那人は曾て蘭領東印度に一支配權を有せしものなり、其後歐人に依り其領土權を奪はれたるものと云ふも可なり、故に之を往時に比すれば其政權を失して唯商權を保留するものと云ふへく、固より大體に於て退歩の境にありと云ふへきのみ、其支那人の現在の地位の如きは之を比すれば恰も日清戦争前の朝鮮に於ける支那人に髣髴せり、其隆盛なるは亦明かなりと雖必ずしも永遠の間に之を奪ふことを得ざるにあらざるは、朝鮮に於ける支那人衰亡の歴史に徴して之を推すに難からざるなり、夫の歐米人と雖も亦然り其隆盛なる一は全く其政權に伴ふものなり、今後と雖政權の伸縮と共に其勢運に進退を來すは亦火を觀るよりも明かなり、吾帝國臣民の蘭領東印度に於ける現況は實に悲慘を極はむ、此狀を目撃するもの今後の帝國臣民の發展に關して大に其望を失ふは固より亦一見解なりと雖も、退て熟ら其然る所以を考察せば是れ一は帝國臣民か蘭領東印度に於て現實に着手するの日頗る淺きものあると、一は之に従ふ現在の帝

國臣民の力量手腕餘りに輕小なるに主として原因せり、彼の南洋消極論の如きは全く現在の奮闘の堅志なき短見者流の見解にして、其論議の淺薄なる毫も吾人をして耳を假すの價値なきは極めて明かなり、吾人は深謀熟慮先づ蘭領東印度の現狀を詳にしたる後、徐ろに帝國臣民か其上に活動するの長計大策を決定せざるへからず、是れ實に刻下に於て最も急要なる案件にして世人か深く且大に其思を潜めて計畫せんことを希望するものなり

吾帝國の現狀は殖民及海外發展を以て其國是と爲さるへからざるは、敢て吾人の警言を待たずして己に明白なり、吾帝國臣民の發展區域は内に在りては先づ朝鮮及臺灣に指を屈せざるへからず、是れ新附の殖民地を帝國の真正の領土たらしむるに於て止むへからざるの必要を認む、外に在りては西隣に支那大陸を控へ、東隣には米大陸を抱き、南面せば先づ來るものは馬來群島たる蘭領東印度及米領比立賓にして、其後方には濠州大陸と南米とを以て其將來の望を維くへきものあるに似たり、而して其外に向て發展すへき邦土中支那大陸か帝國臣民に對して最先の好望を有するは全く疑を容るゝの餘地あるを認めず、之に次

くものは其自然の趨勢に任ずるとせば米大陸の西岸を以てせざるへからず、是れ實に吾帝國臣民の比類なき發展地域にして、其天賦の富源、其氣候の快適、其人口の稀薄、及其距離の接近とは、正に天然なる帝國の發展地域を開放するものなりと雖も、今や米國政府の狹量は殊更に人為的制限を設け、全く其門戸を帝國臣民に對して閉鎖せり、是れ人文の自然發展的氣運に對して逆流するものと謂ふべく、其遠からずして米國政府が其非を喻り過を改むるの日到來すへきは正に疑ふへからずと雖も、刻下に於ては之を帝國臣民の發展地域中より除外すへきは亦善隣の交誼を全ふするに於て止むを得ざるものなり、果して然らば蘭領東印度は帝國臣民の發展地域として、現在に於ては支那に次て大に矚目すへきものたるは亦極めて明かなりと云はざるへからず、即ち蘭領東印度の天地は吾帝國の南方の隣國にして、其臺灣を去る僅に數日の行程に過ぎず、之を歐人か一月餘の航路、米人か一月に近き航路を費やして遠來するものとは、同日の論にあらず、其未開なる天賦の富源と其人口の稀薄、其人文の幼稚とは、實に支那を凌駕するの好望を有する帝國の殖民地なりと云はざるへからず、吾人は苟くも乗す

へきの機會ありとせば、速かに帝國臣民か其上に大發展の途を策すへきは固よりなりとす、然るに帝國臣民か該方面に於ける現状の悲惨なるは上述する如く甚しとするは、果して帝國か晏如たることを得へきものたるか、吾人は恐る他日南洋の天地に疾風怒號し、狂瀾天を覆さんとするに到り、帝國が各國と共に角逐力闘を試みんとするに當り、列國より其占有利益の皆無を名とし、除外を宣言せらるゝことなきか、此場合に吾人は如何なる口實を以て其主張を貫くへきか、吾人聊か杞憂を抱かざるなきを得ざるなり、故に吾人は朝野の人士か速かに帝國臣民か南洋の天地に大活躍を試むへき方案に付て、眞面目にして遠大なる長計を確立せんことを希望して止まざるものなり

帝國臣民か蘭領東印度に活躍を試みんとせば、如何なる方針手段を採らざるへからざるか、之に關しては先づ何等かの機會の捉ふへきものあらは必ず其上に特別利権の獲得を計るへきは最も力むへきの主たるものなり、之に次て極めて平穩且普通の手段たるものは帝國臣民の通商貿易の發達を計るは其一なり、帝國臣民か移住を奨励するは其二なり、帝國臣民か其内地に於ける起業を計畫す

るは其三なり、此等の經營に關しては宜く朝野の人士が深謀熟慮遺算なからしむることを要す、是れ洵に刻下の一大案件なり、吾人は今や輕しく之が根本的解決を試みんとするものにあらず、唯當面の急務として先づ着手實行を要すべきものと認むるもの、二、三を左に掲げて世人の参考に資せんとす

第一、蘭國政府に迫り蘭領東印度内地の自由開放を要求せざるへからず

現在に於て帝國臣民が蘭領東印度に於ける活動に關して最も障害を爲すものと認むるものは蘭國政府が東印度に於て其開港地を除くの外は、原則として内地を閉鎖し苟も政府の特許あるにあらずれば其内地に居住を許さずとするこゝと是なり、蘭國政府は此特許は其殖民地に浮浪煽動的にして治安に妨害ある人物の入込を防止するの必要上止むを得ざるものにして、政府が信用するに足ると認めたる紳士及實業家に對しては容易に特許を與ふべきを揚言せるも、事實に於ては此特許を得るは頗る困難にして早きも半年又は一年を費し、遅きは五年、十年を経るも之を得る能はざるものあり、現に吾人が旅行中「セレベス」島の「ミナハツサー」地方に於て一日本人が農事經營を行へるもの、其事業の必要上大工

四人を内地より其經營地に招きたるに、此特許を得ざる爲に其渡來せる大工をして空しく一年以上「ミナハツサー」開港場「メナト」に停留せしむることとなり、殆んど其目的を水泡に歸せしめたるを實見せり、此の如き痛苦は居留民の發展の根本的妨害たるは明白なり、要するに現時の内地閉鎖主義は帝國臣民の爲め非常の不利にして之が爲に殆んど其内地に於ける事業の經營を不能たらしむるものあり、殊に此問題は帝國臣民の起業には最も痛切なる關係を有せり、何となれば支那人の如きは已に多人數が内地に居住移民せるを以て、此制限は事實上格別の苦痛と爲らず、彼等は内地に於て悠々濶歩して任意に其事業を行へり、又歐米人に在りても已に内地必要の箇所には相當に根據地を確有するものあり、且歐米人に對する此特許の適用は甚だ寛大にして、其事業の施行上殆んど全く不便を感ずるものなし、故に此制限の齎らす所の不利は獨り今後新に活躍を試みんとするの帝國臣民の爲め最も酷烈なる適用を見るものと云ふべし、是れ帝國政府が大に奮起して之に對して異議を提出して其排除を計るの必要ありとする所以なり、況んや蘭領東印度の天地は實に東洋南洋間の一大寶庫にして之

か開拓には其四圍の國民の參加すべきは固より當然なり、而かも其中瓜哇島を除くの外は今や全く未開の寶庫に屬し、其人口の如きも僅に二「キロメートル」平均七人を越へざるの小數に止まれり、將來和蘭國一個の手に依りては到底其開發の期すへからざるは極めて明白なり、宜く之を天下と共に自由開放して大に其開發を計るべきは、實に自然の趨勢と云ふへし然るに和蘭政府が獨占して全く外國に閉鎖せんとするは、利己にのみ奔り、蘭領東印度の開發を忘れたるの措置なり故に帝國政府は此點より觀察して、斷然和蘭政府に其内地の自由開放を迫らざるへからず、此主張は宜く政府に於て大決心の下に之を提出するを可とす、假令和蘭政府の神經に觸るゝものあるも固より之を問ふべきにあらず、蘭領東印度に於ける經濟的發展は吾人の正當なる權利なり、吾人は堂々として公然に之を主張し、一步も退歩するを許さず、如何の障害あるも固く執て之を排除するの決心を要す、唯其施行の細目及條件等に付ては此大原則を破らざるの程度に於て兩國の利害を打算計量して、適當なる協定を爲すべきは亦明なりとす

第二、帝國駐在領事館を増設して政府をして積極的に蘭領東印度の事情に關

して確實なる調査研究を爲さしむべきこと

現在に於ては蘭領東印度の大天地に於て帝國領事館は、僅に瓜哇「バタウイヤ」に一箇所を見るのみ、獨乙國か瓜哇に於ても數箇所其他「ボルネオ」「スマタラ」「セレベス」等の各島に各領事を駐在せしめ、汲々として調査に怠りなきの狀に比すれば、實に帝國の無爲且謹慎に過ぐるを驚かざるを得ず、帝國政府も將來蘭領東印度に於て十分なる利權の獲得を求めんとせば、宜く其態度を改め、先づ瓜哇以外「スマタラ」「ボルネオ」「セレベス」等に領事の駐在を増置して、相競ふて各島に特別の調査を爲さしむへし、而して領事館員に付ては從來の一時駐在方針を全く廢して、領事以下職員は皆永久駐在の制として、原則として一定の調査を了はるにあらざれば、其更迭を許さざることを、すへし、而して館員の語學の如き從來の如く單に獨英佛語に止めずして、其東印度地方に於て最も必要なる馬來語、和蘭語等に熟通せしむることを力とめ、以て其地方事情に精通せしむることを計るへし、而して外務省より毎年中央より吏員を派遣して中央との連絡を完全に計るを要す、此の如くせば、當該地方の調査に關して必ずや一段の進歩を見るべきもの

あることを確信す、是れ實に帝國臣民の將來の發展を求むるに最も急要の措置なりと信す

第三、政府は蘭領東印度の通商貿易及移民の發展に關して進て其積極的獎勵の方法を講せざるへからず其手段の重なるものを擧ぐれば即ち左の如し

- (a) 蘭領東印度に對する航海獎勵費を増加し、斷然從來の姑息手段を廢棄し日本郵船會社又は大阪商船會社等の大會社に特命し大に、當該地方の航海權の取得を計り以て移民及貿易上の大發展を講すへきこと
- (b) 蘭領東印度に移住するに必要な教育を施すへき學校を、特設して移民に適當なる青年を養成すること
- (c) 有力なる實業家の相次て、東印度地方の視察を促かすへきこと
- (d) 三井物産會社に勸誘して斷然現時の出張所組織を擴張して有力なる支店を設置せしめ奉公的に十分なる調査及試験を爲さしむへきこと
- (e) 三菱會社にも支店の設置を勸誘すへきこと
- (f) 臺灣銀行の支店又は出張所の設置を命し金融上の調査と同時に移住民

の金融上の利便を開くこと

第四、政府は新に南洋拓殖會社を設立して帝國臣民の移住、内地の起業及利權の獲得を經營すへきこと、是れ實に當面の緊急事務にして此地方に於ける帝國臣民の發展は此途に依るにあらざれば決して之を求むる能はざるものと認む、之に關しては別に意見あるを以て茲に之を畧す

以上は唯當面に於て施設の急要を感ずるものを列記したるに止まる、吾人か皮想の見を以て敢て漫に之を言ふ所以のものは、蘭領東印度に對する帝國臣民の發展は實に刻下の一大案件たるに依り宜く朝野の人士が眞摯なる努力研究を促さんとするに外ならざるなり

大正四年九月一日印刷
大正四年九月五日發行

南洋一研究
蘭領東印度奧附

正價金貳圓五拾錢

禁漢譯



著者 中山成太郎
發行者 江草重忠
印刷者 松澤玳三

東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地
東京市神田區一ツ橋通町五番地

發行所

發賣所
發賣所
發賣所

有斐閣書

有斐閣雜誌
終閣書
影閣書
玉堂書店

東京市神田區南神保町十三番地
東京市本郷區森川町一番地
東京市牛區早稻田鶴卷町
東京市牛込區看町二十二番地

▼中央大學講師 稻田周之助先生著

殖民政策

菊一册 正價金八拾五錢 送料金八錢

本書は殖民地及殖民政策の意義を明にし、殖民政策研究法、殖民經營の目的、法律並に經濟上に於ける殖民地の區別より其の歴史的研究と殖民地の統治を叙し最後に其の統治政策に論及し對土著人民政策、土地制度、交通運輸、産業政策、貨幣金融機關等を説くこと甚だ詳なり

▼法學士 河田嗣郎先生著

植民地 ブラジル

上製 全一册 正價金六拾錢 送料金六錢

東塞西閉、天涯地角、今や方に我同胞五十萬の増殖を容るゝの地なからむとす。此危急存亡の秋、退嬰萎縮に甘んずれば即ち已む我大和民族天賦の運命を開拓し其の大理想を實現せんとする抱負雄圖を懐く之士は必ず來つて此の書を一讀せざるべからず名づけて「植民地としてのブラジル」と云ふ新進氣鋭の河田先生の犀利なる眼光と豊富なる識見とが實地踏査せる彼の大富源ブラジルの如何に觀察研究したるかを

▼工學士 工藤謙先生著

膠州灣事情

菊一册 正價金六拾錢 送料金六錢

●●●色刷青島圏外附圖三面口繪十三面挿入●●●
今や我軍重圍の裡に在る膠州灣(青島)其者の真相は著者の實地踏査其精敏なる觀察眼敏なるに依り歴々掌を指すが如く描破せられたり。乃ち此一本を手にすれば彼地の軍事、民政を首め市街、港灣の施設より鐵道、礦山其の他商工業上の諸關係、パノラマの如く讀者の眼前迄有らゆ實狀はに映じ來らむ。

348
307



終